
ユニヴァース

クモガミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユニヴァース

【Nコード】

N0994Y

【作者名】

クモガミ

【あらすじ】

6つの大陸大国と9つの中小島小国が存在し、？無数の世界を宿す？『世界樹』を中心として成り立った、世界『アメストラル』昔、この世界に魔装器まそうきと呼ばれる不思議且つ絶大な力を持った武器が現れ、現代の人々や各国々はこの魔装器まそうきの研究や開発に本格的に乗り始めた頃。

何故か、空から記憶を失ったある一人の少年？カレン？が落ちて来て、その落ちて来たカレンに偶然出会ったある一人の美少女がペンダントを置き忘れ、カレンはそのペンダントを届けるためにその少

女を追いかけるが……………

ひよんな事から、魔装器を手に入れ、そして、少女を追いかけている途中、運命的或いは必然的な出会いと、それに伴って次から次へと厄介事の嵐が待ち構えているなど、行く先々に波乱が満ちたカレシの冒険が始まったのだった。

P・S・ 作者より

この小説はド素人が書いた物で、見られる方は遠慮なく叩いても、辛口評価しても良いので是非、評価してください。ついでに宜しかったら、アドバイスや注意点、もしくは疑問に思った事を気軽に指摘してくれたら幸いです。（この作品は某小説サイトで投稿済みなので、二重投稿になります）

世界『アメストラル』

葉の一つ一つに一つの世界を宿す、世界の母『世界樹』

その『世界樹』の葉の一つ、世界『アメストラル』。

この世界は6つの大陸大国と9つの中小島小国で出来た、『世界樹』の？枝？を中心に作られた世界。

『アメストラル』では、あらゆる不思議な出来事とあらゆる不思議な生物が存在し、人間たちと共に共存し合って生きています。

遙か昔、魔人『アルタイル』と呼ばれる。常識を超えた異常なまでの力を持った邪悪なる者が世界を我が物にしようと企み、その力を持って世界を恐怖と混乱の渦に巻き込み、人々を不安と恐怖で支配しました。

しかし、それを止まるかの如く世界樹から現れた、『光の戦士』と呼ばれる者が魔人『アルタイル』を討ち、世界は救われた。

それから約600年後、空からとても巨大な？船？が落ちてきて、その？船？にはこの世界には無い遥かに進歩した技術と科学、そして？魔装器まそうき？と呼ばれる。強力で不思議な力を持った武器がありました。

人々はその？船？に居た人達を？『神の遣い』？と呼び、崇められました。

ちょうどその頃、死んだはずの魔人『アルタイル』が復活し、人々

は再び恐怖と絶望に支配されました。

しかし、それを討たんとせん勇者『トラル』とその仲間達が現れ、共に力を合わせ、見事魔人『アルタイル』を倒し、世界は再び安寧と平和を取り戻した。

そして、しばらくの年月が経ち、『アルタイル』が居なくなり、人々はこの平和の時代が何時までも続くかと思っていたが、その人々の思いとは真逆に各国々は自国の覇権の為、もしくは国の存続や繁栄の為、或いは利己的な目的か己の正義や理想の為、それぞれの思惑の元。

各国々は『神の遣い』が齎した魔装器まそうきを使って、戦争を勃発させ、長い時の間、争い続けました。

それから約400年後、戦争状況は一旦落ち着き、大きな戦争が無くなった現代の人々は『神の遣い』の技術と科学を吸収して、目覚ましい程の技術力と科学力が進歩し、昔より暮らしが豊かになった各国々は、？魔装器？の研究と開発に本格的に乗り始めた頃。

新たな物語が動き出そうとしていた……………

世界『アメストラル』（後書き）

このヘンテコなプロローグが読者の皆さんにちゃんとご理解いただけるか心配です。

空から落ちてきた少年と湖に居た少女

朝日が昇り、新しい日を教えてくれる日差し、空は晴れ、雲はあるが、太陽を包み込む大きさは無く、日光が雲によって、隠たり出たりする程度であった。

そして、鳥たちは空へ羽ばたき、雲の下まで飛び上がった。その鳥たちの上の雲より、さらに上から、？少年？が落ちてきた。

少年は重力に沿って、どんどん下に進み、雲の中を突き破り、更に下へ落ちて行った。やがて鳥達も通り過ぎ、その落ちている？少年？がやっと目を覚ます。

「……………」
少年は、まだ寝惚けたような顔で、周りを見渡した。

「……………」
少年は、今自分が置かれている状況をまだ理解しておらず、落下していく中で、自分が今何処に居るのか、よくよく考えてみると。

「……」
少年は、やっと、自分の状況を把握し、慌てて周りを見回りだした。一方少年の遥か下にある湖に人影があった。その人影は水浴びをしている一人の少女でした。

「~~~~~」
少女は上機嫌に水を体に浴びさせていた。少女はもう十分だと思いい、大きな岩場の上が小さな滝になっている岩場の溝の中に昇り上がり、中に置いた服を取って、着替えをしようとした。

「……………！！……………！！」
一方少年の方は、慌てるも虚しく、みるみると地上に近付き、下にある湖がハッキリ見えてきて、後数十秒で湖叩きたけられる事は目に見えていて、少年は咄嗟に手を前に出して、腕をクロスさせて、身を固めて目を固く閉じた。

「……！！」

ついに湖に激突し、落下の衝撃で大きな爆音と共に大きな水柱が立ち、岩場の溝の中に居た少女は、突然の出来事に驚く。

「！ なっ、何！？」

困惑する少女。一方少年は、湖の深い処まで入り込み、湖に激突した衝撃のせいで意識が朦朧となり、意識を放しそうになるが、息が出来ない事に我を取り戻し、上を見上げ、日差しが差し込む水面を見て、無我夢中に上を目指して泳ぎ、数秒経たない内に湖に顔を出した。

「プハッ！」

息が出来る事を確認したちょうどその時、太陽に雲が掛り、日差しが途切れ、湖一帯が薄暗くなった。少年は、そんな事も気付かず、何度も呼吸が出来ることを確認し、ようやく周りを見渡し、薄暗い中をとりあえず前に進み、目の前にある、小さい滝がある岩場まで近づこうとしたその時。

雲は太陽から離れ、日差しが戻り、湖は再び照らされ、辺りが瞬時に明るくなった。

「！！」

視界がハッキリして少年は、岩場の溝の中に誰か居る事に気付く、一方少女も湖の中に誰かが居ることに気付いた……………

「……………」

二人はやっと、お互いの存在に気付き、目と目が合い、見詰め合った。しかし、ここで一つの問題があった。それは少女が、まだ服を着る前であり、下着は手に持ったままで、言わば少女は全裸の状態であり、少年はその事に気付き、目のやり場に困り、目を背ける。

「……………」

気まずい空気が流れ、長い様な短い沈黙が続く。そして。

「イヤアーーーーーっ！！！」

叫び声と共に、魔法陣が現れ、魔法陣から大きな水の塊が少年に向かって飛び勢良く飛び出し、少年は避ける余裕も無く。

「！！！」

爆音と共に水柱が立ち、少年はまともに少女の魔法を喰らい、再び水の中に入り込む。

一方、少女は慌てて服を取って、少年の事など見向きもしないで、その場を急いで離れ。

そして、少女の渾身の重い一撃を喰らった少年は朦朧とする意識の中で、ついに意識を手放した……………

……………いつしか時が経ち、少年はいつも間にか陸に上がり、小さな岩を背にし、眠っていた。そして、少年は目を覚まし、辺りを見渡す。左の方を見ると、さっきまで居た湖がすぐ傍に見える。すると右の方から足音が聞こえ、足音がする方に顔を向けると、そこには、やや太った髭の生えた男性が歩いてきて、男性は少年の事に気付く。

「おお、起きたか！ どうだ、何処か痛い所は無いか？」

と、男性は、心配そうに声を掛け、傍に寄ってくる。

「やあ、驚いたぞ！ 水を汲みに此処の湖に寄ったら、急に馬鹿デカイ音が響いてな！ ビックリしたら、そう経たない内にまた同じぐらいのデカイ音がしてな！」

男性は自分が此処まで来た経緯を話し出した。

「何事かと思ってやって来たら、その湖の真ん中で、お前さんがプカ〜っと水の中に浮かんで居たもんだから、たまげたよ！ もうビックリの連続だ」

と男性は淡々と話を進めて行く。

「急いで、お前さんを引き上げて、容体を調べて診たら、気絶してるみたいだったんでなあ、だからお前さんが目を覚ますまで、介抱していた訳だ。」

全ての経緯を話した男性は、ゆっくり腰を下ろし、少年の横に座り、手に持っていた、水筒を少年に差出した。

「飲むか？」

少年は、男性の心遣いに感謝し、水筒を手にした。

「ありがとう」

礼を言い、水筒を口に含み、中の水を口に流す。喉を2、3回鳴らし、乾きを潤いだ。少年は水筒を男性に返し、男性はそのまま水筒を口に含み、喉を鳴らす。水を飲み終わり、男性は少年に尋ねた。
「所でお前さん、湖で何があつたんだ？」

少年は男性の質問に対して、湖での出来事を思い浮かべた。目を開けたら空の上で、何が分からず、そのまま湖に落ちて、水面から顔を出して、そして前を向いたら。

「女の子が……………」

ボソツと少年が呟く。

「女の子が？」

反応して、男性も言い返す。

「女の子が……………」

少年は湖で遇った女の子を思い浮かべる。つらりとした綺麗な肌に、腰の辺りまで下ろした長くて美しい金髪、濁りの無い水のように蒼く透き通った瞳、それに見合った気品さを感じる顔、そして豊かな……………。

邪的な事を思い出そうとしてしまうところだった少年はそれ以上、思い出すのをやめ、頭を左右に振る。

「お、おい、どうした？ 女の子が一体どうしたんだ？」

男性は少年の行動に困惑する。

「い、いや！何でもない……………何でも……………」

何かを隠そうとしている少年の言動を察した男性は。

「じゅあ、質問を変えるが、お前さん何処から来たんだ？
此処から近い村から来たのか？」

この質問に少年は……………。

「何処から……………？」

顔を俯き始め、考える少年……………。

「何処から……………来たんだろう？　僕は……………一体何処から来たんだろう？」

何も思い出せない少年の発言に『まさか』と言葉を無くす男性。そして。

「僕は……………誰なんだろう？」

思いも由らない言葉を口にした少年は、その後、男性に自分の身元が確認できる物を持っていないかどうか、少年に確認させる。

「身元がわかる様な物無し、所持金も無し、服以外何も無し。困ったなあゝゝ、これじゃあゝゝお前さんが何処から来たかさっぱりわからんよゝ」

ハアッと溜息を吐く男性。

「本当に何も思い出せないのか？」

この問いに、少年は首を縦に振って答える。男性は再び溜息を吐く。

「しかし、本当に困ったなあゝゝ……………ん？」

男性の視線が少年の顔から下に向き、左腕の手首に止まる。

「お前さん……………その左手首に付いているのは……………」

「えっ？」

少年は男性に指摘された左手首を見ると、手首にリング状のような物が付いていた。それに触れて、何なのか確かめた男性が。

「ほう……………木製のブレスレットかあ、良く出来てるなあゝゝ」
ブレスレットの出来まいに関心したのか。興味深そうに少年の手を取り、手の平の方まで見る。すると。

「おっ、文字が刻み込んであるぞ！　えつとなになに……………」

そこには、K A R E N　と刻み込んであり。

「カ・レ・ン？」

その名前に聞き覚えを感じた少年は。

「きつとこれがお前さんの名前だよ。ブレスレットに名前が刻んである。ということは、お前さんの物であり、同時にお前さんの名前でもあるんだよ。」

確信したのか男性は安堵の息を漏らす。少年もこの名前を何度も呟く。

「カレン……カレン……」

少年は自分が口に出している名前を言う度、強い確信に近い物を感じ。それを察した男性は。

「で、それがお前さんの名前だよな」

期待に満ちたような目で、少年の心境を窺う男性、そして。

「うん……これが僕の名前だと思う……」

少年は自分の名前がわかった様で、笑顔で答える。

「よし！ これは大きな一歩だぞ」。名前さえわかれば、少しはお前さんの身元が分かるかもしれん。最もお前さんの事を知っている人に出会えばの話だが……まあなんとかなるだろう。あつ、そうだ！」

何か思い出したのか、男性は自分の胸に手を当てた。

「ワシはコルト。世界を旅して渡る商人だ」

「商……人……？」

「そうだ。最も世界中の国々を周っている訳じゃ無いけどな」

頭をポリポリ掻きながら、照れ臭そうに言うコルト。

「ああ、そういえば、これから近くの村に行こうと思うんだが、お前さん——いや、カレンも一緒に来るか？ 乗せて行ってやるぞ」

その発言に首傾げるカレン。

「乗せる？」

「おおそうだ。ほれ、あそこに馬車が見えるだろう？ あれがワシの馬車だ」

指を指す方に木岐を越えた先に馬車が止まっていた。

「……………」

その提案について考え込むカレン、そんなカレンの様子を見たコルトは気を遣って。

「まあ、突然の出来事で、そう簡単に決められる事じゃないよな……。じゃあ……少し時間をやるから、決心したら馬車の方まで来てくれ」

「ありがとう……………」

カレンは礼を言い、コルトは『じゃあな』と手を上げ、振り返って馬車の方に向かう。一人になったカレンは湖の近くを歩きながら頭の中を整理しながら考える。

「（僕は何で空から落ちて来たんだろう……？　なんで記憶を失ったんだろう……？　そしてこのブレスレット以外、何で何も持っていないんだろう……？）」

しかしどんなに思い出そうとしても何も浮かぶ事は無かった。

「（だめだ！　考えても全然思い出せない！　どうして何だ！！）」

頭を左右に振って、行き場の無い不安や焦りに取り払おうとした。
「本当に……………どうしてこうなったんだろう……………」

……？

ブレスレットを見詰めながらボソツと呟いていると、あの時の少女が立っていた小さな滝が掛った岩場の溝に近付いていた。

「ん……………」

視界にあの少女が居た岩場の溝の中に何か光る物を見つけ、カレンはそれに近付き、手を伸ばして拾い上げる。

「これは……………ペンダント？」

拾い上げた物は綺麗な金色のペンダントで中央に小さな宝石みたいな物が埋め込んである。何となくカレンはペンダントの上の部分を押してみると、ペンダントの前部分が開き、そこには。

「これは……………」

そこには、破れた小さな写真があり、その写真の中にあの時の少女と小さな男の子が居た。しかし、写真に写っている少女はあの時

の少女に比べて幼く、これは昔の写真と思ったカレンはそのペンダントを見詰め、ゆっくりフタを閉じた。すると。

「あれ？ このペンダントにも裏に文字が刻んである」

ペンダントをひっくり返して見ると、そこにはカレンのブレスレットと同じく、文字が刻み込まれてあった。ペンダントには B L U E——とそれ以上は磨り削られたのか、よく読むことが出来なかった。

「ブルー？ これがあの子の名前？」

ブルーという名前かどうかわからないが、このペンダントがあの少女の物という可能性は高かった。

「（これは……………あの子にとって、大切なもの……………？）」

何故かそう思ったカレンは再びペンダントを見詰める。

「……………」

そして数秒間の沈黙が続き、カレンは何か決心したかの様に強く頷き、ペンダントを胸ポケットにしまい、コルトの馬車の方に向かって走り出す。木岐を抜けた先に馬車の席で待っているコルトを見つけて。

「コルトさん！」

名前を呼ばれて、コルトは振り向き。

「おお、来たか！ で、決心したか？」

待っていたのか、答えを早速、返事を聞き始め。

「はい、とりあえず。その近くにある村に行ってみたいと思います。だから連れて行ってください！」

「よし！ そうと決まれば、お安い御用さ！ さっ、早く乗んな！」

「はい！」

了解したカレンは、馬車に昇り上がり、トルコの隣の席に座る。そして。

「ちゃんと乗ったな？ よし！ 出発だ！」

ハイッ！ と、馬に出発の掛け声を出し、馬車を前進させる。

「その村つて、此処からどれ位掛るんですか？」

「なーに、此処からだほんの十分程度で済む。あっという間さ」
そう言いながらコルトは馬車を進め、限りなく続く青い空の下で
土の大地を走り始めた……………

盗賊と謎の物体 出現

.....そして、馬車を走らせてそう経たない内に、遠くからだが一つの村が見えてきて。

「ほれ！ あそこに見えるのが『カムーシャ』村だ」

「あれが.....」

もうすぐ着く村を眺めていると、カレンは道の先に人影を見つける。

「あつ！ 人が倒れてる！」

道の真ん中で人が倒れているとカレンはコルトに伝える。

「ぬお！ 本当だ！」

コルトは、倒れている人の前で馬車を停止し、二人は馬車から降りる。

「大丈夫ですか！？」

「やれやれ！ 今日には倒れている人が多い日だ」

倒れている人に駆け寄るカレン、溜息を吐きながらカレンに続くコルト

「うつつ.....」

小さくて弱った声を出すうつ伏せ状態の男性に、急いで駆け付けたカレンは手を伸ばして、立ち上がらせようとするが.....

「！」

突然、カレンの動きが止まり、カレンの目先に一本の剣が突き付けられていた。その剣は倒れていた男性から伸びていて、うつ伏せだった男性はゆっくり立ち上がった。

「動くなよ。ボウズ。そっちのじいさんもな」

立ち上がったスキンヘッドの男は歪んだ笑みを浮かべ、剣をカレンの喉元に移した。剣を突き付けられたカレンは動く事が出来ず、コルトも突然の出来事に呆然としていたが。

「お前.....盗賊だな！」

「今頃気付いたのかよ……おい！」

男は近くに在った大きな岩に声を掛け、そこからやたら髪の毛が長い男が出て来て、その後から、その長い髪の毛の2倍以上大きい大男が登場し、二人はスキンヘッドの男と同じ服装をしているからにして、仲間である事は明らかだった。

「へへっ、うまくカモが引つ掛かったなあ！　ハン！」

「ああ！　しかも見た所あの馬車は、商人の馬車だ！　金目の物だけじゃなく、食い物や酒も入っているかも知れねえ」

ハンと呼ばれたスキンヘッドの盗賊は、良い獲物を捕まえたみたい嬉しそうに話す。

「おい！　ラジリカ！　お前はハンと一緒にあのガキとじじいを見張れ、俺はあの馬車の中身を探る」

「おゝゝゝ、わかったよ。ケビー」

なまった様な声を出し返事する。ラジリカと呼ばれた大男は、スキンヘッドの男の隣まで移動し、ケビーと呼ばれたロン毛の盗賊は、コルトの馬車の中に入り込む。

「いいかお前ら、動くんじゃねーぞ。抵抗さえしなけりや命までは奪う事はねえ。大人しくしてるんだな」

カレンに剣を突き付けたまま警告をするスキンヘッドの盗賊、その隣でのほほんとした顔で、カレンとコルトを見詰める大男。もう一方の馬車の中に入り込んだロン毛の盗賊は早速、金目の物を探そうとした。

「さてさて、金目の物は――、ん？」

するとロン毛の盗賊はある物に目が止まる。

「何だこれ？　剣の取っ手と虫？」

そこには、古びた錆付いた剣の取っ手の様な物と虫の置物の様な物が置いて在った。

「何だよ。ガラクタかよ」

ガラクタだと即決めつけたロン毛の盗賊は、つまらなさそうにガラクタと思った二つを無視し、金目の物を探し続けた。

そして、カレン達の方では未だに剣を突き付けられて、動けない状況が延々と続いても取り乱す事も無く、じっと待ち続けた。

「おい、ケビー！ 何か金目の物を見つけたかーーーーー？」

スキンヘッドの盗賊が馬車の中に居るロン毛の盗賊に呼び掛ける。

「まだだー！ もうちょつと待ってくれーーーー！」

「早くしろよーーーー！」

スキンヘッドの盗賊が馬車の方に顔を向け、カレン達から目を外し、その一瞬を見逃さなかったコルトは、懷からナイフを取り出し、スキンヘッドの盗賊に斬りかかる。

「！ ぬおっ！！」

それに気付いたスキンヘッドの盗賊は素早くバックステップを行い、ナイフをギリギリに避ける。

「大丈夫！？ ハン！？」

大男は仲間が斬りつけられ、心配そうに声を掛ける。

「テメー……、じじい！ よくもやりやがったな！！」

思わぬ攻撃をされたスキンヘッドの盗賊は、怒りを露わにし、コルトに怒鳴りかかる。

「おい！ どうした！ 何があった！？」

馬車の中に居たロン毛の盗賊は、外の騒ぎを聞き付け、馬車から飛び出す。

「お前達にやる物はない！ さっさと何処かに行け！！」

ナイフを構え、盗賊達に強気な態度を見せるコルト。

「コルトさん……」

コルトの突然の行動に驚くカレン。

「この野郎……調子乗りやがって！ おい！ ラジリカ！」
は~~~~い」

スキンヘッドの盗賊に呼ばれ、大男はトルコに向かって、その重そう体突進させる。

「うおおおおお！！」

ナイフを両手で握り締め、大男に突進して突き刺そうとするコル

ト。だが。

「！」

あっさりと大男の片手だけで、両手を握り締められ、突撃を止められるコルト。

「くっ！！」

「そりあ！」

大男はコルトの両手を握り締めながら、コルトを軽々と投げ飛ばし。投げ飛ばされたコルトは地面と激突して、転がっていった。

「があー！！」

「コルトさん！！」

投げ飛ばされたコルトに駆け寄るカレン。

「大丈夫ですか！？ コルトさん！？」

「う……………」

何処か痛めたのが弱った声が漏れるコルト、地面に仰向けなコルトの上半身を抱き上げるカレン。すると、スキンヘッドの盗賊が傍に寄って来て。

「抵抗しなれりや、命まで取らねーつつたのによー。ばかなじいさんだぜ」

まるで自業自得だと言わんばかりの言葉を吐き、スキンヘッドの盗賊は剣を振り上げ、コルトに斬りかかろうとした。

「待つて！ もうやめて！」

カレンはスキンヘッドの盗賊の前に立ち、コルトを、身を挺して守ろうとする。

「ああ？ なんだボウズ？ おまえから先に斬られたいか？」

スキンヘッドの盗賊は、カレンの行動に苛立ちを感じた。

「お願いだから、許してやってください！ この人はもう戦う力は残っていません！」

盗賊相手に必死に訴えかけるカレン。しかし。

「だめだ。そのじじいは俺達の警告を無視して抵抗した。だからもう抵抗しないよう、殺すんだよ」

理不尽な事をして、理不尽な物言いと言う盗賊に、カレンは。

「どうしても、許してくれませんか？」

一歩も引かこうとしないカレンは、どうしたら許してくれるか問い出した。すると、スキンヘッドの盗賊は。

「そうだなあ、お前が代わりに斬られるってんなら。許してやつてもいいぞ」

悪意の塊のような理不尽な要求を言い出した盗賊達は、歪んだ笑みを浮かべ。カレンの反応と返事を楽しもうとした。

「カ、カレン……」

「……………」

心配そうにカレンを呼ぶコルトにカレンは少しの間、目を閉じ、そして、決意した。

「わかりました。それで許してくれるなら……」

「！ お、おい！ カレン……」

まさかの返答したカレンにコルトは慌てて叫ぶ。そして盗賊達も予想外の答えに少し驚いた顔をするが。スキンヘッドの盗賊は、ニヤッと笑い。

「そうかあ……………じゃあ、遠慮なくやらせてもらうぜ……」

スキンヘッドの盗賊は、剣を振り上げ、垂直にそのまま振り下ろす。

その瞬間、カレンは死を覚悟して目を深く閉じた。そして。

「ヒヒ……………ン……」

突然、馬車の馬が叫び、盗賊達は驚き、振り下ろされた剣はカレンの頭上数センチ上で止まり、その場に居た全員が馬車の方を見ると、そこには。

「な！ なんだありや……」

「……………」

馬車の中から日光のような強い光が漏れ出していた。

「まっ、まぶしい……」

「ど、どうゆう事だこりゃ……」

「……………?」
全員が不可解な出来事に驚いていた。そして、フッと馬車から光が無くなった。

「い、一体何が……………!!」
すると馬車の中から山吹色の謎の物体が飛び出してきて、スキンヘッド盗賊は眼を見開いた。

「あ、あれは……………!」
「何だあれ!!」

その謎の物体に見覚えがあるコルトと、ついさつき見つけた物とは気付いていないロン毛の盗賊の眼に映った、謎の物体はスキンヘッドの盗賊の方に突撃するかのように突進した。

「なっ……………!!」
謎の物体はスキンヘッドの盗賊の剣の方に体当たりし、剣を弾き飛ばした。

「な、何だコイツ!!」
スキンヘッドの盗賊は、慌てて剣の所まで拾い直す。すると謎の物体はカレンの周りをグルグルと回り始め。カレンの手元に、持っていた白く染まった剣の取っ手の様な物を落とす。

「うわっ」と!
何の前触れも無く落としたそれを慌ててカレンはキャッチしたら、謎の物体は取っ手の剣格にある、青い珠の反対側部分に差し込まった。

『REG I・I N』
レジイン

謎の物体と剣の取っ手の様な物から突然声が出て、それと同時に、剣の取っ手の様な物の剣格の上に昇るようにみると形が形成されてゆき、大きな剣のような形になり始めた。

「あ……………!!」
目の前で起こった事に目を疑うカレンであったが。

「くそ! 何だか知らないが!!」
「ッ!」

何が起こったか分からないが、スキンヘッドの盗賊はカレンに進し、剣を振り下ろした。

振り下ろされた剣をカレンは謎の物体によって出来た剣で受け止め、強い金属音が生じた。

「ぬ！」

「ッ！」

力の押し合いにカレンは力一杯に剣を押し出す。

「うわっ！！！」

スキンヘッドの盗賊の剣は、力尽くでカレンの剣にあっさりと弾き飛ばされ、同時にスキンヘッドの盗賊の身体も一緒に弾き飛ばした。

「この！！！」

「！！！」

仲間が続くように、隙を突いて後ろから斬り掛かろうとロン毛の盗賊はカレンに向かって剣を垂直に振り下ろしたが……………

「！！！」

素早い反応で振り下ろされた剣をカレンは横にズレてかわし、そして避けた直後、剣を持ち直して、剣の剣背部分をロン毛の盗賊に向かって、打ち上げるように振り上げた。

「ぶふっ！！！」

剣はロン毛の盗賊の上半身の正面に当たり、まるで鳥が飛び立つように吹き飛び、そしてそのまま落下して地面に激突し、ガクッと気絶する。

「く、くそ！　おい！　ラジリカ！　やっちまえ！！！」

「アイアイサ~~~~~」

今度は大男がカレンに突進し、背中に背負っていた大きな斧を取り出し。

ラジリカ「チヨイサ~~~~~！！！」

力強い一振りをカレンに向けて振り下ろした。

「！！！」

さつきとは比べ物にならない激しい金属音が生じ、その中でカレンは大男の一振りを受け止めていた。

「ば、バカな！ 俺達の盗賊団の中で自分と同じぐらいの大きな岩を持ち上げる程の怪力を持つラジリカの一撃の止めるなんて！」
信じられない光景を見ているような声と顔を出して、スキンヘッドの盗賊は啞然としていた。一方、大男の方も自分の一撃を止められたがショックだったのか、動揺する。

「そ、そんな~~~~~」

カレンは大男が剣の押し合いの中で、ショックで力を抜き始めた事に気が付き、腕に更に力を強める。

「っああああ！！！」

大男の斧を力尽くで弾き飛ばし、後ろに下がって、カレンは剣を後ろに構え。

カレン「はああああ・・・！！！」

刃先に力のような物を溜め込み。そして。

「剛魔！！！」

掛け声と共に剣を振り払い、剣は空中で大きな風の波を作り、その波が次第に衝撃波となって大男のところまで走り飛び、真っ正面に直撃する。

「ぶへへっ！！！」

風の壁のような物に激突した、大男は空高く吹き飛んだ。

「へ？」

呆然としていたスキンヘッドの盗賊の上空に大男の影が覆い被る。

「わああああああ！！！」

さつき、カレンに剣ごと弾き飛ばされた時のダメージで動く事が出来ず。そのまま大男がスキンヘッドの男の上から迫り来るように降って来て。

「ぐふっ！！！」

「ぐえっ！！！」

グシャッとスキンヘッドの盗賊は大男の下敷きになってしまい、

ガクツと気絶する。大男は地面に叩き付けられ同じくガクツと気絶する。

「ふう……………」

盗賊三人組を倒したカレンは溜息一つ零した。

「……………」

「！ コルトさんっ！」

戦いが終わって啞然と地面にまだ座り込んでいるコルトにカレンは身を案じて駆け寄った。

魔装器と人探し

三人の盗賊をたった一人で倒したカレンは、戦いで疲れた様子は全く見当たらず、しゃんしゃんとコルトの傍にたどり着いて、起き上がらせようと手を伸ばす。

「大丈夫ですか？ どこか怪我とかありませんか？」

「あ、ああ。大丈夫だ。よっこいしょっと！」

カレンの手を借りて地面から起き上がったコルトは、カレンが持っている。謎の物体によって出来た大きなライトピンク色の剣に視線を外さなかった。それに気が付いたカレンは。

「あのコルトさん、これの事を知っているんですか？」

剣を正面に運んで、カレンはコルトにこれが一体何なのか問いかける。

「ああ、これはたぶんあの古びて錆付いた剣の取っ手と虫の置物だ」

「？ 何ですか、それ？」

言っていることが理解できず、カレンはコルトに言葉に首を傾げると、剣の取っ手に差し込まれた謎の物体が勝手に剣格部分から飛び出した。

「レジ REG I・アウト OUT」

続いて、声と共に取っ手から剣の刀身が花びらが散るように消え、謎の物体は取っ手から飛び離れた次には、またカレンの周りを飛び回る。

コルト「ああゝゝ、そうだなゝゝ、詳しい事はまず『カムーシャ』に着いてから話そう」

その提案に頷いたカレン。二人は馬車に乗り、『カムーシャ』に再び向かった……………

……そして馬車を走らせてそう経たない内に目的地の村に着いた。

「おゝゝ、着いたぞ。此処が『カムーシャ』だ」

「……………」

『カムーシャ』に着いたカレン達は、馬車を村の出入り口の近くに止め。馬車から降りる。

「ちいさな村だか……………どうだ？ 見覚えあるか？」

「……………」

村を見渡すと丘の上に家と思われる建物が幾つもあり、そしてこの村の中央ら辺に井戸がポツリとあり、その他には野菜畑が村の至る所に在るだけだった。

「……………」

村を見渡したただけで何かを思い出すという都合の良い展開は訪れず、コルトの問いにカレンは首を横に振る。コルトは溜息を吐き、目の前を通り過ぎる鍬を持った村の男性を呼び止める。

「すまないが、あんた」

「はい？」

村の男性はコルトに呼び止まれ、カレン達の方に振り向く。

「この子に、見覚えはないか？」

コルトはカレンに指を指して、村の男性に尋ねる、男性はカレンに近付き、顔を覗かせる。じつくり見た後、男性は。

「いいやゝ、見掛けない子だなゝ。この子が一体どうしたんだ？」

村の男性はカレンを知らないと言え、コルトの方に窺う。

「いいや！ 知らないならいいんだ！ すまないな、呼び止めてしまった」

村の男性に謝り、その場を離れる、コルトとカレン。

「んゝゝゝ、どうやら此処の住民じゃないようだな、お前さんは？」

此処の住民じゃない事に、再び溜息を吐くコルト。そんなコルトの顔を眺めていたカレンから。

「（グウウ~~~~~）」

「？」

気が抜けるような腹の鳴き声がカレンから聞こえた。それを聞いたコルトは。

「なんだ、腹が減ったのか？　しょうがないな~~~~、じゃあ~~~~」
コルトは辺りをキョロキョロ見渡し、ある一軒屋に目が止まる。

「あの宿屋で、腹ごしらえをするか」

宿屋と言ったと家に入るコルトに後に続いて入るカレン。二人は中に在った、テーブルの所に置いてある椅子に適当に座り、宿屋の受付にオニギリを注文した。間もなくオニギリがテーブルの上に置かれ、二人はオニギリを手に取り。

「いただきます」

カレンは一言挨拶を言い、コルトと一緒にオニギリを口に運ぶ。そして幾つかあったオニギリを食べ終わり、コルトの方から口が開く。「お前さんには、助けられたな。お前さんが居なかったら、ワシはどうなっていた事やら」

カムーシャに着く前に襲われた盗賊の件で、お礼を述べたコルト。それに対してカレンは。

「僕の方こそ、色々と助けて貰って、ありがとうございます」

自分も助けられたと、お礼を言い返すカレン。お互い心から感謝し、優しい笑みを浮かべる。

そんな二人の周りを飛び回る物体が居た、それは馬車から飛び出したあの山吹色の謎の物体であった。

謎の物体はまたカレンの周りをグルグルと回り、ピタッと肩に着地した。

「ところで……、これは一体何ですか？」

自分の肩に止まった謎の物体に指を指してコルトに尋ねるカレン。

「ああ、それはな———」

………一方、カムーシャの外で。

「いててて、おい！　いつまで寝てんだ！　ラジリカ！　さっさと退け！」

大男の下敷きになっていたスキンヘッドの盗賊は、目を覚まし、自分の上でまだ気絶してる。大男に退けるように大声で起こす。

「むう~~~~、もう食えないよ~~~~」

起き上がった大男はまだ眠そうに呟く。

「何寝惚けてんだ！！　しっかりしろ！　くそ！　せつかくの獲物が！」

寝惚けた大男に喝を入れる。それに続いて同じく気絶していたロン毛の盗賊も目を覚まし。

「痛つつ~~~~！！　くそあのガキ！」

ロン毛の盗賊は起き上がって、打たれた箇所を撫で、恨めしそうにカレンの事を呟く。

「逃がしやーしねーぞー！　今度会ったら………」

「所での剣……、何処かで似たような物を見たような……」

スキンヘッドの盗賊はやっと大男の下敷きに解放され、カレンの持っていた剣に見覚えのような物を感じていた。

「ああ~~~~、オデも~~~~、どこかで見た事ある~~~~」

「そつえばそうだな……、確か何処かで……？」

盗賊達は首を傾げ、思い出そうとする。すると、スキンヘッドの盗賊が思い出したような素振りを見せた。

「思い出した！　あれは——」

………そして、『カムーシャ』の宿屋に戻る。

「………魔装器？」

カレンは聞いた事が無いような言葉に首を傾げる。

「そうだ。今お前さんの肩に乗っている奴が？核^{コア}？という物で、お前さんがその手に持っている剣の取っ手の様な物が？ガジェットー？ていう物さ」

コルトはカレンの肩の上に居る謎の物体と手に持っている、剣の取っ手のような物の通称を、指を指して語り、魔装器についての説明を淡々とし始めた。

「ガジェットーは言わば、ツールの様な物さ、そこにその核^{コア}をはめ込む事で、形を形成して、武器の様な形になり、この二つで一つに成った姿を魔装器と言うんだ」

コルトはカレンにわかり安いように、丁寧に説明を続ける。

「核^{コア}のほとんどが虫の形をしているそうだな、その核^{コア}の体の何処かに名称が書かれている筈だ。調べてみる」

カレンはコルトの言われた通りに、肩に乗っていた謎の物体もとい核^{コア}を抵抗などはされずに掴み取り、名称を調べた。

全体を大まかに見渡すと、背中^コの辺りに小さいが文字が刻まれており、カレンは眼を凝らし。

「STRIKE……………BEETLE？」
ストライク ビートル

そう書かれており、カレンは手に持っている核^{コア}の全体をもう一度、よく見てみると、確かにカブトムシの様な形をしていた。

そして、カレンが核^{コア}の名称を判明したところで、コルトから溜まった気苦労を吐き出すような溜息が漏れた。

「まさか……………そいつが、魔装器だったとは……………」

コルトは意味深く呟き、カレンはその言葉に疑問を抱く。

「どうゆう意味ですか？」

カレンはコルトの言葉の意味を尋ねる。

「それを見つけたのは2年前の話だ、ある海岸に打ち上げられていてなあ、見つけた時、当時は古ぼけた錆付いたガラクタだと思っていたが、どうしてか……………拾っちゃってな。馬車の中ずっと置きっ放しにしてたんだ」

コルトは当時の経緯を語った。そしてカレンにはまた新たな疑問が

浮かぶ。

「えっ？ それじゃあ何でこれは、こんなに……………新品同様な姿をしているんですか？ 古ぼけて錆付いていたんですね？」

核とガジェットを両手でそれぞれ持ち、コルトに見せ付け、当時と今が矛盾していることを指摘するカレン。カレンの問いにコルトはその矛盾の訳を話す。

「それはたぶん、魔装器が持ち主を選び見つけ、自己再生を行なったからだろう。」

「魔装器が持ち主を選ぶ……………？」

魔装器が持ち主を選ぶという事に、反応し再び首を傾げるカレン。その疑問を打ち払うようにコルトが述べる。

「魔装器は誰でも使えるって訳じゃない。嘘か本当かは知らないが魔装器には意思と心が在って、魔装器が持ち主を自分で選び、持ち主が死なない限り一生付き従うらしい」

「（僕が……………選ばれた？ ………………何故？）」

カレンはコルトの説明の中で、自分は何故選ばれたのか、フと頭の中で思う。

「つまり、あの時、お前さんがあの盗賊にワシを庇って斬られそうになった時、馬車の中から強い光が出ていたろう？ あの時あの中で、魔装器がお前さんを持ち主に選び、自己再生を行なっていたからあんなに光っていたんだろう」

カレンはあの時の盗賊に襲われた時の事を思い浮かべる。

「そして自己再生が完了し、光が消えた共にお前さんの所にやって来たという訳だろう」

コルトはあの時の出来事を納得いくように推測して言い当てた。カレンはその推測を何となくだが理解し、コルトの説明が終わる。「まあ、ワシが分かる事はこれだけだ。他については何もわからない」コルトはお手上げのように手を上げ、話は終了し、カレンは魔装器についての情報がある程度得て、二人は一息を着いた……………

………少しの時が経過し、またコルトの口が先に開いた。
「ところで、カレンはこれから一体どうするんだ？」

「え？」

突然の問いに反応が遅れるカレン。

「お前さんが『カムーシャ』の住民じゃないって事がわかった時点で、お前さんの帰る場所はわからない事に振り出した。このままわからないって訳にはいかないだろ？」

「……………」

コルトはカレンがこれからどうするかを尋ね、その問いにカレンは考え込む様に黙った。そして少しの間が経ち、口を開いた。

「人を……………探しに行きます」

やっと開いたカレンの口から、予想外の言葉が出てきた。

「探すって……………誰を？」

コルトは少し驚いた顔をした。そしてカレンの言う探しに出す人物について聞いた。その問いに対し、カレンは胸ポケットからあるペンダントを取り出した。

「それは……………」

「ある一人の女の子が落として行った、ペンダントです。僕はこのペンダントを届けるために、その女の子を探しに行きます」

カレンの答えに戸惑うコルト。

「おいおい、おまえさん。自分が記録喪失だって事を……………」

「確かに、今の僕は自分が何処から来たのかも、帰る場所も分かりません。でもこのまま此処に居たって何も解決しない事は変わりません。だから、今は自分が何をすべきかを考えたんです」

カレンはコルトに自分の答えを聞かせ続けた。

「だからまずは、このペンダントを届けに行くんです。」

「い、いや……、しかしだねえ……………」

「それに……………」

「？」

コルトは自分の意見を言う前にカレンの言葉に口が止まる。

「それにこれは彼女にとって、とても大切な物だと思うから……………」

「……………」

「だからこれを届けたい。届けてあげたいんです」

カレンの真っ直ぐな思いと目を見たコルトは。

「やれやれ……………」記憶を失って、どうなることやらと思っていたが、ここまで物事をハッキリと決められる物とはね……………」いやいや大したもんだよ」

カレンの決意に感心したのか呆れたのか、コルトは苦笑いを浮かべた。

「そこまで、決心しているなら、ワシがともかく言うのはおかしいよな」

「いえ、そこまで、言ってくれるのは僕を心配してくれたからなんですよね。ありがとうございます」

カレンはニコッと笑い、コルトは凶星を突かれたかのように照れ臭そうに目を背けた。カレンは椅子から立ち、宿屋から出ようとした。

「お、おい。何処に行く気だ？」

コルトがカレンに行き先を尋ねる。

「その子が一体何処に行ったのか、村の人達に聞いてみたいと思います」

「え？ 何処に行ったかわからないのか！？」

「はい！ だからこれから聴きに行きます！ それじゃ！」

別れの挨拶と共に、外に出て行ったカレン。コルトはその背中を見て。

「やれやれ……………」一度決めたら止まらない。意外と頑固かもしれないなあ……………」

コルトは溜息を吐き、一人椅子に座り呆けた……………」

パンチョー

颯爽とカレンは宿屋から出て、村に居る住人を手当たり次第、少女に関する情報の聞き込みを開始した。しかし……………現実
は甘くはなかった！

「女の子？ さあ……知らないなあ？」

「知らないの……？」

「女の子？ 見てないわねえ……？」

「おやおや、お前さん、もしかしてその子の追っかけかい？」

「えっ？ いやだ。まさかあなた、ストーカー？」

「ねえねえ、お兄ちゃんって、ストーカーなの？」

「わー！ ストーカーだ、逃げろ……！」

「……………？」

何やら、いつの間にか誤解されたような感じになってしまったカレンは、それでもめげずに聞き込みを続けていった……………

……………そして、カレンが聞き込みを始めてかれこれ
一時間経とうとしていた。

「……………だめだ。誰もあの子を見たっていう人が居ない。この村を通った訳じゃないのかなあ？」

まったくあの少女に関しての情報が些細なことも手に入らず、困り果て大きな岩の前で座り込むカレン。

「困ったなあ……」

首を傾げ、悩み込み、どうしたらいいのかそんな事考えていたら。

「ふっふっふっ、何か困っているようだな……？」

フと大きな岩の裏から声が聞こえた。

「だったら、この俺様にまかせろ……！」

声が岩の裏から岩の上から聞こえ、それと同時にカレンの頭上に人影が被った。カレンは上を見上げると、そこには腕を組みながら仁王立ちした瞳孔が細い茶色い眼とライトグリーン色の髪と猫の様な耳が生えた一人の少年が立って居た。

「誰？」

「よくぞ聞いてくれた！ 俺はこの村を仕切る、バンチョー・ロロ！！」

そこまで聞いていないが、ロロと名乗る少年は岩から飛び降り、カレンの前に着地する。

「お前か、この村に来た？二人目？のよそ者は」

「（？二人目？………？）」

顔をのぞみ込むように近付き、ふてぶてしい態度で接するロロに対してカレンは接し方より、ロロが今言った？二人目？の方が気になった。

「！——君………今、二人目って！」

立ち上がったカレンは、ロロの肩を掴む。

「僕たちより先に『カムーシャ』に来たのは、長い金髪の女の子だった！？」

「な、なんだ！？ おまえら知り合いなのか！？」

動揺したロロに目もくれず、問い続けるカレン。

「長い金髪で、蒼い目をした女の子だったんだよね！？」

「あ、ああ。そうだよ。そいつがどうしたんだよ？」

ロロの答えにやっと光が見えたカレンは、彼女が何処へ行ったか尋ねる。

「それで、その子は何処に行ったの？」

まるで子供のようなカレンの期待に溢れた目を見たロロは、ニヤツと笑う。

「ふっふっふっふっ、知りたいか？」

肩を掴まれていたカレンの手から離れ、勿体つけるように焦らすロロ。

「うん！ 知りたい！」

とバカ素直にカレンが答えると。

「そうか！　じゃあそれは俺に勝ってから聞くんだなー！！」

「へ？」

口口の予想外の発言にキョトンとするカレン。

「その女の行き先を聞きたいなら、このパンチョー・口口に勝ってからにするんだな！」

あつはつはつは、と高笑いし、困惑するカレン。

「えっ、だってさつき、困っているなら俺にまかせろ！　って？」

「ああ！　だからその協力を得るためには、俺様に勝ってからじゃないとだめなのだー！！」

まるで後で、取って付けたような発言で、カレンに勝負を吹っ掛ける口口。

「……………」

むちゃくちゃな吹っ掛けにカレンは少し考え込み、そして。

「わかった。勝ったら教えてくれるんだよね？」

覚悟決めたカレンは、口口に再び問う。口口はカレンの答えを聞いて、またニヤツと笑い。

「ああ、勿論だ！」

余裕の表情を見せ、口口は楽しそうに答える。

「じゃあ……………」

身を構えるカレン。

「ああ、始めようぜ……………」

同じく、身を構える口口。カレンは辺りを見渡し。

「えっと…………、ストライクー！！」

叫び声と共に、カレンの魔装器の核が何も無い所から飛んで現れ、カレンの手の平に止まり、カレンはズボンにぶら下がっていたガジェットーを取り出し、核をガジェットーに差し込む。

「REGI・IN」

声と共にガジェットーの上から形を形成し、盗賊たちを撃退した時

と同じ、大きな剣の姿を現した。

「な、な、なんだよそれ！？ なんなんだよ！？」

見た事が無い物を見た様な分かりやすいリアクション取り、動揺を隠せない口口。

「魔装器つて、らしいよこれ」

口口の動揺を解くために、親切に教えるカレン。

「ま、魔装器？ それが？」

はじめて見るのか、珍しそうにカレンの魔装器を見詰めながら、警戒をする口口。

「ま、まあいいさあ。魔装器だろうが、昨日徹夜で作ってこれで！」

腰に掛けて合った、鞆から何か取りだす口口。

「口口特製お手軽爆弾！！」

取り出した物をカレンに見せつけるように前に出し、自分が作ったとわざわざ伝える口口。

「昨日まで徹夜で作った、小型爆弾だ！ いや~~~~ここまでのサイズにするのは苦労したな~~~~」

「そうなの？」

「ああ！ なんとたつて火薬の量と導火線の配置がなかなかうまく決まらなかつくてよ~~~~！」

「それでそれで」

「それでな~~~~って……………、そうじゃね！！」

戦いの中のん気に話をしている事に気付き、我を取り戻す口口。

「とにかく！ こいつの威力を見よ！！」

振りかぶった口口は、カレン目掛けて導火線に火が付いた特製爆弾を投げ付け。カレンはそれを横にずれて避ける。爆弾はカレンを通り過ぎて地面に落ちる。

「！！」

爆弾は地面に落ちた後、瞬間に爆発し、爆発した所の地面はポツカリと凹んで、土は小さい土の塊に成り、上からパラパラと落ちて

来る。

「どうだ!! このサイズでこの威力!! 喰らったら只じゃあ、すまねーぞ」

確かにあの小さな物であるの威力とは思えない代物だった。ロロは我慢そうに喜ぶ。カレンは爆発した所を見ていると。

「へへっ、どうだ? 降参するならしてもいいぞ——?」

まるで勝ったかのように誇らしげにカレンに降参を薦めるロロ、だがカレンは。

「降参は……しないよ!」

「!」

「君に、彼女の事を聞き出すまで、逃げたりはしない!」

カレンの強気な態度にロロは目を丸くする。

「ま、マジでやり合う気か?」

自分の爆弾の威力を見ても逃げないカレンに驚くが。ロロはゆっくりと顔を俯いて、不敵に笑う。

「いいぜ……、そっちがその気なら——」

言い終える前、ロロはカレンの方に顔を向けると、カレンはそこに居ず。いつの間にかロロの頭上に飛び上がり……。

「せいっ!!」

カレンは大きな剣を力の限り振り下ろす。

「ぬわっっ!!」

ロロは後ろに飛び下がって間一髪で避ける。振り下ろされた剣は地面を叩き割り、いきなり不意に斬りかかったカレンに対してロロは「あ、あ、あぶねえな!! いきなり!! 急に斬り掛ってくるな!!」

思わぬ反撃を喰らったロロはカレンに怒鳴る。

「……………」

カレンは黙って剣を持ち直し、再び構える。ロロも体制を立て直し。「しょうがねえ…………、だったら、俺様の実力を……………思い知らせてやるぜ!!」

すぐさまロロは鞆から数個の爆弾を取り出し、カレンに向かって投げる。カレンはその爆弾たちを掻い潜って避ける。

「ッ！」

放たれた爆弾は次々と爆発して、粉塵を撒き散らす。その中でカレンはロロに接近するが、ロロはまた爆弾を取り出し、カレンの前の辺りに放り投げる。

「！！！」

慌てて後ろに下がり、爆発から逃れようとするカレンにロロは不敵そうに笑う。

ロロ「近づけさせないぜ！」

爆弾は間もなく爆発し、カレンはとっさのバックステップでどうにか爆風から逃れられた。

「くっ！！！」

思うように近付けないカレンは焦りを感じる。それに対してロロは自分が優勢だと感じて、笑みを浮かべ、次々と爆弾を投げ付ける。

「っ！！！」

状況を打開しようとカレンは、向かって来た爆弾の一つを打ち返す。

「なぬっ！」

打ち返した爆弾はロロの方へ飛び戻って行った。

「ぬおっっ！！！」

思いも依らない爆弾の帰宅にロロは慌てて横に飛んで避け。

「っ！！！」

爆弾はロロを通り過ぎて爆発したが、避けたのは良いが慌てて飛んで避けた為、着地の際、ロロは体制を崩した。

「今だ！」

その出来た隙を見逃さず一気に接近するカレンであったが。

「甘いぜ！！！」

カレンの接近を読んでいたのか、一個の爆弾を懷から取り出しカレンに投げ付ける。

「！！！」

慌てて腕に力を入れて爆弾を打ち返すが……………

「あ……………」

勢い余ってか、スルツとカレンは手を滑らして、打ち返して振り上げた剣を上空に放り投げてしまった。口口も予想外だと思ったが。

「へっ、これでお前の獲物は無くなったな……………」

「……………」

カレンは唯一の武器の無くし、焦ってしまう。口口はそんな焦ったカレンの表情を見て、勝利を確信したような笑みを浮かべる、そしてまた鞆から爆弾を取り出し。

「じゃあ……………、これで終わりだ！……！」

そして、カレンに向かって爆弾を放り投げようとした瞬間……………

「……！」

爆弾を投げ飛ばす瞬間、口口の頭の上からカレンが上空に偶然放り投げてしまった剣が、口口の頭に落ちて来て、剣の剣背部分に当たった。

「……………」

「かつ……………かつ……………」

啞然とするカレン。あまりの痛さに言葉にできない声を出す口口、カレンに向かって投げ飛ばす筈だった爆弾をポロつと自分の足元に落としてしまい、爆弾の導火線の火は火薬部分に到着し。

「……！！」

足元で爆弾は爆発し、爆発の後、煙の中に黒焦げた口口が立っていた。

「……………」

バタツつとそう経たない内に口口は倒れ、啞然としていたカレンは、ハッと気付いて口口の元へ慌てて駆け寄る。

「だ、大丈夫！？」

しやがみ込み心配そうに体を揺さぶって声を掛けるカレン。

「……………」

返事がない……………、カレンは口口の命が危ないと思い、誰かを探そ

うと立ち上がった時。

「すいませー……ん!!」
「？」

声が聞こえた方に視線を移すと、遠くから人影がカレンたちの方に
向かって声を掛けて走っていた。

やがて、その人影はカレンたちの所までたどり着いた。

自爆兄貴の妹の証言

やって来たのは、一人の少女だった。

「すいません！ 兄が迷惑を掛けてしまつて！」

口口を兄と呼んだ一人の少女はカレンに頭を下げ、謝罪した。

「兄？ 彼が君のお兄さん？」

カレンは黒焦げた口口を指して少女に尋ねる。

「はい！ そこで黒焦げている口口・グライヴィーの妹、イミナ・グライヴィーです！」

黒焦げた兄を全く心配せず、自己紹介をする口口の妹イミナ。

「イミナちゃんか……」

外見上カレンや口口とは年が離れているそうには見えないが、口口と同じ瞳孔が細い茶色い眼とグリーンライトの髪と猫の様な耳をしている、それに口口と似たような物を感じ、カレンは彼女が口口の妹だと納得した。

「本当にすいません、家の兄が迷惑を掛けてしまつて……、後でキツク言っておきますので！」

イミナはまた頭を下げ、カレンに謝罪する。カレンは困ったように焦り。

「いやいや！ いいよ謝らなくて！ それより、君のお兄さんがこうなつてしまつた事を聞かないの？」

カレンのもつともな質問にイミナは溜息を吐く。

「どうせ兄の事です。きっとあなたに勝負だとか勝手に吹っ掛けて昨日徹夜で完成した爆弾の威力を試して自慢したかっただけなんですよ」

まるで知っていたかのように兄の行動原理を推測で言うイミナ

「もしかして……、見てたの？」

「まさかあ、爆発の音を聞き付けて、急いでお店を飛び出して駆け付けたら、黒焦げた兄を見つけた瞬間、大体の想像が尽きました、

どうせまた調子乗って、自爆したんでしょう」

仕方のない兄を持った妹の苦労の経験だろうか、さっきまでの出来事の容易に想像できたようで、イミナは再び溜息を吐く。カレンは苦笑いし、ある重大な事を思い出す。

「あつ！ そうだ！ 彼に聞かなきゃいけない事があつたんだ！ でも……………あの状態じゃ……………」

今の口口の状態じゃ、あの女の子の行き先を聞けないとカレンは困惑するが、そんなカレンの言葉を聞いたイミナは。

「えっ？ 兄に聞きたい事って何ですか？」

カレンの言葉に反応したイミナは自分の兄に聞きたい事を尋ねるカレンに尋ねる。

「君のお兄さんに今日外から来た女の子について教えて貰う筈だったんだ」

そうカレンが答えるとイミナは。

「えっ？ それって……………今日朝早くに外から来た、長い金髪の蒼い瞳をした綺麗な女の人ですか？」

イミナの発言にカレンは反応する。

「そうだけど……………、もしかしてその子に会ったの？」

カレンの質問に頷くイミナ。

「はい……………、その人に会ったのは、あたしが働いているお店の開店直後の事です。わたしはいつもどおり朝の店番をしていました」
今日朝早く出会った外から来た少女についてイミナは語った……………

……………

……………朝早く『カムーシャ』の村のほとんど住民がまだ起きていない時間に、食糧店のドアのベルカランコロンと鳴る。

「いらっしゃいませー！」

朝の店番をしていたイミナの所に一人のお客が入って来た。その客は長くて綺麗な金髪に蒼く透き通った瞳、メイドのようなドレスのような服にそれに似合う美しく整った顔をした少女であった。イミナはその少女を一目で見たら。

「（うわ~~~~）……、綺麗な人~~~~）……、きつと外から来た人だ~~~~）」

女性のイミナでも見惚れる容姿の少女は、店内を少し見渡し、イミナの居るカウンターまで歩いてくる。少女はカウンターにあるメニュー表を見て。

「これと……………これ……………あと……………これもちょうだい」

少女はメニュー表にある食糧を指で指し、イミナに注文をする。

「あつ、はい！ 少々お待ちください！」

ボ~~~~と見惚れていたイミナは、少女の注文に我を取り戻し、少し慌てて少女の注文通りカウンターの後ろの棚から注文の品を取り出し、袋の中に包もうとした。そのイミナの後ろ姿見ていた少女は。

「ねえ、あなた、『カム―シャ』から『レイチウム』に向かうには、どう行けば良いの？」

不意に少女はイミナに尋ねた。

「えっ？ 『レイチウム』って軍用都市『レイチウム』事ですよね？」

少女の方に顔を向け、作業を続けるイミナ、イミナの返答に首を頷く少女。

「今は無理だと思いますよ。一月前の大地震のせいで『レイチウム』に向かうための一本道の大橋が壊れてしまつて、今は修理中ですから渡る事ができないんですよ」

イミナは残念そうに少女に説明する。

「他に行く道は無いの？」

少女は他の道を尋ねる。

「他に……………ですか？ 『カム―シャ』を少し東に行った所に『水底の洞窟』が在って、そこ通り抜けてば『レイチウム』に着きます

が……………」

「そう……、わかったわ、ありがとう」

少女の返答にギョッとするイミナ。

「お、お客さん！ 言い遅れましたけど、あの洞窟は最近魔物が大量発生して、とても危険ですよ！ やめておいた方がいいと思います……………」
、それに洞窟の先に在る、大きな運河を渡ることとはできませんよ……………」

「運河？」

少女はイミナの言った運河に反応した。

「はい、この大陸特有のとても大きな川で、その川を渡る為にさつき言った、大橋が作られたんですけど……………」

イミナの言った『レイチム』の一本道の大橋を思い出した少女は、理解したように頷き。

「そう……………そうゆう事なら問題は無いわね……………」

「えっ……………」

少女の言葉に耳疑うイミナ。そして丁度良くイミナは注文の品を袋に入れ終えて。

「もう、できた？」

「えっ？ あっ……………は、はい！」

少女の指摘にイミナは急いで注文の品が入った袋を少女に渡す。

「全部で、980トルになります！」

袋を受け取った少女に注文の品の値段を告げるイミナ、少女は手に持っていた1000トル札を差し出し、お釣りを貰わないまま出口に向かう。

「あっ！ お客さんお釣り！」

イミナは呼び止めようとするが……………」

「急いでいるから、いらないわ」

ランコロンとドアのベルが鳴り、少女はその言葉を残して、そのままお店を出てしまい、イミナはその少女の背中を見詰めながら立ち尽くした……………」

.....ここまでがイミナの見た記憶であった。

「.....という訳です.....」

イミナは朝の少女の出会いをそのままカレンに話した。

「その事を兄にも話したんですが.....まさか私が話した事を悪用するなんて.....」

「軍用都市『レイチム』.....?」

溜息を吐くイミナ、少女の行き先をやつと掴めたカレンは、少女の行き先の場所を呟く。

「ところで.....カレンさん、その人とお知り合いなんですか?」

素朴な疑問をイミナはカレンに尋ねる。

「えっ? あつ、いやゝゝ、知り合いつて訳じゃないけど、顔見知り程度くらいなのかなあゝゝ?」

「?」

答えに困るカレンに首を傾げるイミナ。

「と、とにかくその子に渡さなきゃいけない物があるんだ!」

「渡さなきゃいけない物?」

カレンの発言に相槌を打つように問うイミナ。

「渡さなきゃいけない物ってなんですか?」

イミナはカレンの言う渡さなきゃいけない物が何なのか聞くとカレンは。

「彼女の.....大切なものさ.....」

「大切なもの.....?」

「うん! だから、一刻も早く彼女に会わなくちゃいけないんだ!」
力強く自分の目的を話すカレン。そのカレン言葉に妙に納得したイミナは。

「.....うん、そうですね.....事情はよくわかりませんが、頑張ってください!」

カレンを応援するように励ましの言葉を贈るイミナ。

「ところで……………、彼の事は良いの？」

黒焦げた口口を指で指すカレンは、イミナに尋ねる。

「ああ、大丈夫ですよ、あれくらい！ 頑丈ですから家の兄は！」
と言いつつイミナは、未だに倒れている黒焦げた兄もとい口口の首根っこを掴み。

「それじゃあ、私は帰って兄の看病をするので、カレンさん本当に兄がご迷惑を掛けました！ 機会があれば、また会いましょうね！」
ペコリツと頭を下げて、別れの言葉を告げ、兄の口口をズルズルと引きずりながら自分らの家に帰っていくイミナの背中を心配そうに見詰めたカレン。

「だいじょうかな……………？ 彼……………？」

口口の身を案じながら、地面に放置したままの魔装器を拾って、そのまま宿屋に戻るカレンであった……………

感謝と別れ……………そして、思わぬ再開

口口の妹、イミナから有益な情報を手に入れて、金髪の少女の行き先が分かったカレンは村を出る前に会っておかなければならない人の元へ、駆け走っていた。

「お！ 来た来た、おーいーい！！」

「あつ」

そして、待っていたのかコルトは宿屋の前に立つて、宿屋に戻ってきたカレンを見つけ、呼び掛ける。それに気付いたカレンは会って話しておきたい恩人コルトの元まで走って行った。

「コルトさん！」

「おお！ どうだったカレン？ その子に行き先がわかったか？」
帰って来たカレンに結果がどうだったか聞くコルト、カレンはコルトの前に止まり。

「はい！ わかりました！ 彼女は軍用都市『レイチウム』に向かったそうです！」

カレンは嬉しそうにコルトに答える。

「『レイチウム』にい？ でもあそこに行くための橋は、今は修理

中――」

「はい、だから『水底の洞窟』に通りに行くんです」

カレンの返答にギョッとコルト。

「ま、待て！ カレン！ 最近あそこは魔物が大量――」

「はい！ それも聞きました！」

「……………」

自分の発言を悉く打ち払うように遮るカレンの返答は、悪意がこればつちも無いその笑顔を見ると何とも言えない感覚を覚えるコルトであった。そんなコルトにカレンは。

「コルトさん！ 本当にありがとうございました！」

「へっ？」

カレンの唐突のお礼にキョトンとするコルト。

「僕がここまで足を運べたのも、湖で助けてくれたのも、ご飯を御馳走したくれたのも、見ず知らずの僕を助けてくださって、本当にありがとうございます！」

カレンは頭を下げ、自分の感謝の気持ちを全て、コルトに伝えた。

コルトはカレンの感謝を照れ臭そうに頭をポリポリと指で掻いて。

「そう畏まらなくても——」

「後、これをお返しします」

またコルトが言う前にカレンは手に持っていたガジェットをコルトに差出す。

「！ カレン……………」

コルトは目の前に出された魔装器の一部ガジェットを見て、カレンの顔を見る。

「これは元々僕のじゃなくてコルトさんの物ですから、僕が勝手にお借りしていただけなので、これはコルトさんにお返しします」

カレンはそう言うと、ストライクと呼び、自分の魔装器の《（コア）》を呼び込み、もう片方の手で核を掴み、ガジェットと一緒にコルトに差出すが、コルトは手を前に出して、制止した。

「いや……………それはもうお前さんの物だ」

「コルトさん……………いや、でも！」

カレンはそれでもコルトに返そうとするが、コルトは手を前に出したまま、首を横に振る。

「これはお前さんを選んだんだ……………、だからお前さんしか使えない、説明したろ？」

「でも、これは……………」

コルトの発言に戸惑うカレン。コルトはそんなカレンに淡々と語りかける。

「例え、ワシがこれを持っていたとしても、ワシにはこれを使う事ができない。そんなのは宝の持ち腐れという奴なもんよ」

「宝の……………持ち腐れ？」

言葉の意味が理解できないのか、首を傾げるカレン。

「まあ、とにかく……………それはお前さんにやるよ」

あっさり自分の物だった魔装器をカレンに譲るコルト。そんなカレンの手に握られていた核は力ずくでカレンの手から離れ、またカレンの周りを飛び回り、また肩に止まる。

「それに、そいつはお前を気に入ったみたいだな！」

会って間もないのにもう核に懐かれているカレンにコルトは微笑ましそうに笑い、カレンに一袋を渡す。

カレンはそれを受け取り、中を確認する。

「！これは……………」

中には一つの本といくつかの食材と赤い色の付いたゼリーみたいなのが入っていた。

「ウチの商品の余り物だが……………、もしかしたらこの先、何かしら役に立つかもしれないぞ」

袋に入っていたのは、コルトの商品だった。

「その本は自分の記憶や思い出を書いて、次にまた記憶を失っても大丈夫のように日々の日記として使ってくれ、そして中に入っている食材は道中でお腹が空いた時に使った方がいいぞ、後最後に――」

「コルトさん……………」

震えたカレンの声に、言い止まるコルト。カレンは目線をコルトの目に向け。

「本当に……………お世話になりました！ この恩は忘れても、忘れません！！」

「……………」

再び頭を下げたカレンは、しつこいくらいの感謝と、思いつき矛盾に満ちた発言だが、コルトにあなたへの恩は絶対に忘れないと心強く伝え、そんな気恥ずかしいセリフを吐いたカレンにコルトは呆れたのか感心したのか、溜息を吐き。

「気を付けて……………行ってこいよ……………！」

「はい!!」

力強く返事を返し、後ろに振り返って、村の外へ走り出すカレン。やがて村の外へ出て、東に進む。そんなカレンの後ろ姿を見えなくなるまで見送ったコルト。そしてカレンが視界から見えなくなつて見送りが終わったコルトは宿屋に戻ろうとするが、何か物すごいスピードでコルトの横を通り過ぎて行く人影を目撃した。

「何だ?今の?」

コルトは自分の横を通り過ぎて行った人物の顔をよく見る事ができなかつた.....

..... カレンが『カムーシャ』から出て、東を歩いて約30分くらいが経つたのか、歩いていた一本道の先に森が広がり、やがて一本道の周りは森に囲まれ、そして行き着いた先には大きな岩山に穴が空いた、一つの洞窟らしきものがあつた。

「此処かな?」

目的地に進むために通り抜けなければならない場所..... 『水底の洞窟』、此処がそうだと穴の近くに建てられているカンバンを見つけて確信したカレンは。

「よし! それじゃあ.....」

「待てやゴリア.....!!」

洞窟に入る直前に後方から聞き覚えがある叫び声が聞こえ、カレンは振り向いて見ると、そこには遠くだがこちらに向かって猛スピードで向かつて来る人影があつた。

???「やつと! 見つけたぜ.....!!」
人影はみるとこちらに近付き、そしてカレンの所まで走つて来た人物は.....

「ハアハア.....ハア.....、やつと追い付いたぜ.....」

.....!!」

「君は……………！」

息を切らせて現れたのは『カム―シャ』で会ったロロ・グライヴィーだった。

「決着を……………付けにきたぜ！」

「決着……………？」

息を切らしながら言うロロ、そのロロの発言の意味が理解出来ないカレン。そしてロロは呼吸を整え、深呼吸を行ない、顔をゆつくり上げ……………

「お前との決着を付けに来たに決まってるだろう！！」

「え？」

何を言い出すと思えば、ロロはカレンとの闘いに、決着を付けにわざわざここまで来たようだ。見た所あの時の焦げ跡はすっかり無く、服も新しいのに変え、元気な姿だった。だがそれに対しカレンは。

「いや……………、あれは僕の勝ち——」

「勝負つていうのは！ 自分が負けたと思わなかったら永遠に決着は付かないんだ！！」

カレンの言葉を跳ね除け、断固自分は負けてないと主張するロロ。そしてカレンにビシッと指を指し。

「とにかく！ 決着を付けるまでお前を逃がすかよ！！」

「まったくその通りだぜ！！」

何処からか、カレンでもロロでもない声が聞こえ、ロロはその声に驚き、後ろに振り向き。

「だ、誰だ！？」

ロロは謎の声の人物に向かって呼び掛けた。すると木や草の茂みから一人の人物が出てくる。その人物にカレンは見覚えがあった。

「やっと、見つけたぜ！ くそボウズ！」

「！ あなたは！」

そのスキンヘッドの男は、カレン達が『カム―シャ』に向かっている途中、コルトの馬車を襲った。スキンヘッドの盗賊だった。スキンヘッドの盗賊は何かの合図のように手を振って、その直後、他の

木や草の茂みから盗賊らしき人物がゾロゾロと現れ、カレンとロロの前を囲む。

「な、な、何なんだよ！ お前ら……！」

突然の事態に状況が見えないロロは、現れた盗賊たちに動揺していた。

「お前には用はねえよ、用があるのはそのボウズだ！」

スキンヘッドの盗賊はロロの事をまったく気にせず、カレンの方を向き続ける。

「……………」

「お前には、せっかくの獲物を邪魔されたからな……………」

スキンヘッドの盗賊は忌々しそうにカレンを睨め付けながら言う。

「だが……………今もうあの獲物はいらねえ……………」

そう言うのと、スキンヘッドの盗賊は腰に掛けてある剣を抜き、カレンに向けて指す。

「お前の持つている魔装器を売れば、一生遊んで暮らせる金が入るんだからよ……！」

最高の獲物を見つけた様な大声を出したスキンヘッドの盗賊、そしてスキンヘッドの盗賊の声と共に後ろに居た、盗賊達が一斉に武器を出して、ジリジリと近付いてくる。

「いいかお前ら！ ガキだからって油断するな！ こいつも魔装器使いだ……！ 舐めて掛らず全力で叩き潰せ……！」

「……………おう……！」

スキンヘッドの盗賊の警告に気合い十分な盗賊達、そしてさらにまた木や草の茂みから盗賊がゾロゾロと出て来て、その数ざっと見た所、50人はくだらなかった。

「ところでハン、この獣人のガキはどうするんだ？」

盗賊の一人がスキンヘッドの盗賊に近付き、ロロについて尋ねた。

「そうだなあ……………見た所あのボウズの知り合いみたいだなあ……………」

スキンヘッドの盗賊はロロの方をチラと向き。ロロは盗賊の反応に

困惑した。

「こいつだけ逃がすって訳にもいかねえ！ ついでにこいつも殺っちまえ！！」

「ええ！？ そ、そんなぁ……………」

何で俺までつと言いたそうな情けない声を出す口口。盗賊はまだジリジリと近付き、口口は怖気付いた表情をして、カレンの隣まで後退りをする。

「お、おい！ どうするんだよ……………、こ、このままだと俺達やべえーよ！」

「……………」

圧倒的な数の盗賊達に戸惑いを隠せない口口は、カレンに尋ねる。その問いにカレンは目を閉じ少し考え込む、そして。

「逃げるよ！！」

声と共に洞窟に入つて一目散に逃げ出すカレン。

「えっ！？ あっ！ ちょ、ちょっと待て！！」

唐突に走りだしたカレンに反応が遅れた口口は、急いでカレンの後を追つて洞窟に入る。

「なっ！ 逃げたぞ！！ 追え追え！！」

逃げだしたカレン達を追つて洞窟に入る盗賊達であつたが。洞窟の中は暗くて狭く、大人数で走る程の余裕は無く、全力疾走しているカレン達に差を付けられる事になった、

「くつくそ！！」

スキンヘッドの男は舌打ちをし、暗い洞窟の中で盗賊達の先頭に立ち、カレン達を追い続ける、一方カレン達はこの暗くて長い洞窟の奥をさらに進み続けた……………

水底の洞窟に二人のストーカー

「……暗く狭く何処までも続くと思えてしまうくらい長い通路、その中を全力疾走で走っているカレンと口口は、盗賊達の手から逃れるため、光の见えない先をひたすら進み続けた。

「ハア……おい……！ 待て！ 待ってて！」

カレンの後に付いて走っていた口口はカレンの隣まで追い付き。

「ハア……このまま逃げて大丈夫なのか！？」

「わからない……でも、あの数人達に戦っても勝てるとは思えない……！」

口口の問いに走りながら答えるカレン。

「それに………」

「それに……？」

急に言葉が止まるカレンに口口は顔を覗く。

「それに、あの人達と戦っていたら、彼女に追い付けなくなってしまっ！」

カレンの言う彼女とは、カレンが見つけたペンダントを届ける相手で、あの盗賊達と戦えば彼女に追い付けないと踏んだカレンは盗賊達から逃げ。

「この洞窟で、あの人達を振り切るしか無い！」

このまま逃げて、あの盗賊達を撒くと結論至った。

「それは……賛成だ……、さすがに俺様もあの人数じゃ勝つ気がしねえよ」

どこか歯切れの悪い返事した口口はカレンの提案に賛成する。そんな口口を見てカレンは。

「どうしたの？ さっきから震えているみたいだけど？」

「そ、そんな事はねえよ……！」

あつはつはつと笑い、恍ける口口、カレンはそんな口口に違和感を覚えながら、狭くて暗い通路を進み続けた……

……走ってもうどれ位経つたろうか、やがてカレンと口の体力に限界が訪れ、走る速度が徐々に落ちて来て、そして二人の足が止まる。

「ハア……ハア……ハア、これだけ走れば………あいつらもう追って来れねえよな」

息を荒くしながら、後ろを振り向きカレンに話を振る口口、カレンも息を荒くしながら。

「た、たぶん………」

息を整えようと何度深呼吸を行なうカレンに口口も息を整えながら。

「あの人数だ、この狭い通路を早く移動をすることは出来ない筈だ」
「確かにね………」

いくら数があちらの方が圧倒的に上だとしても、この狭くて暗い洞窟では逆効果であった。

口口は盗賊達に随分着き離れたと思い、再び足を進める。

「よし、この調子でこの洞窟から出て——」

口口が言い終えるまえに突然口口の頭上の岩の壁にヒビが入り、そこから水が噴き出し、口口の顔に直撃する。

「！！　　ブハッ！！」

突然水が顔に掛り、慌てて水から離れる口口。カレンは何が起こったか分からず、水を被って咽る口口を心配して駆け寄る。

「大丈夫！？」

「ゲホッ！　くそ！　水脈が噴き出したか！？」

自分の顔を服の袖で拭きながら、水が噴き出している壁に見る口口、カレンは口口が言った水脈という言葉に反応して首を傾げる。

「水脈？」

カレンが疑問そうに呟くと口口は。

「あ？　何だお前？　此処が何で「水底の洞窟」って、呼ばれてい

るのか知らないのか？」

口口がそう尋ねるとカレンは首を縦に振る。

「いいか？ この洞窟の上に運河っていう大きな川が在るんだ、その川の底に無数の穴が在って、この洞窟のさらに下の所まで繋がっているんだ、で……この噴き出した水がその無数の穴の一つから出てきた水って事だ」

今でも水を噴き出している所に指を指してカレンに解説する口口。

「へえ……、そうなんだ……」

「そうなんだってお前……、何も知らないで此処に来たのか？」
呆れて溜息を出す口口は、淡々と話を進める。

「今噴き出した水は、水が土や岩を少しずつ何十年も掛けて削って出来た穴なんだ、それ以外の穴はこの洞窟じゃない所を通って、何処か別な所に水を貯めているって話だ」

「つまり、この水は偶然この洞窟の中に出てしまった水って事？」

口口の解説を理解したカレンは、噴き出して来た水の訳を指摘する。

「まあ、そうゆう訳だな」

カレンが納得した所で、説明が終わると口口はまた再び歩き出し、カレンもその隣を歩く。

「盗賊達もそんなに早く俺たちに追い付く事は無いが……、問題はこの先だ」

「？ 盗賊達以外にも何か問題でもあるの？」

口口の言う問題に反応したカレンは口口に問い掛ける。

「あるだろ！ この洞窟には魔物が居るんだぞ！」

魔物という言葉に、イミナが言っていた事を思い出し、カレンはあつと呟く。口口が呆れたように溜息を出すとカレンは。

「その魔物って何？」

ガクツとカレンの発言に体が傾く口口、口口はゆっくりと怪訝そうにカレンの顔を見る。

「お前……、それ冗談だよな……？」

恐る恐る口口が聞いてみると。

「冗談じゃないんだけど……………」

苦笑いをしながら答えるカレンに対してロ口は目を丸くする。

「お前本当に魔物を知らないのか!？」

そう叫んでカレンに尋ねるロ口は信じられないと言いたいそう顔をしていた。

「本当も何も知らない物は知らないよ」

そうカレンが返答すると、ロ口はガクツと顔を沈め、ポリポリと頭を掻きながら、顔を上げて小さく舌打ちをする。

「魔物っていうのは、動物よりも危険で凶暴な恐ろしい生き物の事だよ!」

ロ口は吐き捨てるかのようにカレンに説明すると、少し怒ったような顔でカレンに目を向ける。

「そんな事も知らないで、何で此処まで来たんだよ!？」

「彼女に会ったためさ」

怒ったロ口にカレンは至って冷静に返した。

「彼女って…………、村でもさっきも言ってたよな？ 何なんだお前?」

怒りを鎮め始めたロ口は、疑り深くカレンの素性を尋ねる。

「僕は……………」

自分が何者なのか、それが分からないカレンにはこの問いに答える事は出来ないが。

「僕は彼女に一刻も早く追い付かなくちゃいけないんだ! だから此処に来たんだ」

今のカレンは自分の事など覚えてはいない、だが自分がやらなきゃいけない事はしっかりと自覚しているため、ロ口に対しての返答は自分の目的を話した。するとロ口の顔から陰しさが無くなり、瞳孔の細い眼が更に細くなった。

「お前……………まさか……………」

「?」

ロ口のカレンに対する視線が冷たい物に成り、カレンは首を傾げる

と。

お前って……………ストーカーなのか!？」

身を引いてカレンから距離を取るロロ、カレンは何故ロロが自分から遠ざかるのか分からないでいた。

「どうしたの? そんな顔をして?」

カレンはロロの引きつった顔に疑問を抱き、ロロに一步近づくと。

「よ、寄るな! このストーカーめ!」

カレンが近付くとロロも一步下がり、再び距離を取る。

「どうして?」

「どうしてって? そんなの聞かなくなつて分かるだろう!？」

ロロが何故自分から距離を取るのか分からないカレンは、自分が思つた疑問を口にする。

「分からないよ? それに……………君の言うストーカーって一体何なの?」

ガクツとまたカレンの発言に体が傾くロロ。

「ストーカーも知らないのかよ!？」

「うん」

カレンは首を縦に振って答える。

「ストーカーって言うのは、ある一人の人物を追つ駆け回す人の事を言つんだよ!」

明らかに語弊と偏見が混ざつた、間違えた意味をカレンに説明するロロ。するとカレンはストーカーの本当の意味を知らずに理解し、少し考え込む。

「どうしたよ?」

考え込むカレンに問い掛けるロロ、カレンは目線をロロに戻しニコつと笑い。

「じゃあ、君もストーカーなんだね!」

「はっ!？」

笑顔で思いもよらない発言したカレンに驚くロロ。

「だって君も僕を追ひ掛けて此処まで来たんだよね?」

「えっ！？ あっ、いや……………それは……………その……………」

返す言葉が見つからず戸惑い黙りこむ口口は、カレンをチラッと見て考え込み、そして少しの間が経ち……………、やっと口を開く。

「すまん……………俺の……………勘違いだ……………、今は忘れてくれ……………」

……………
「？」

何が言いたかったのか分からずにいたカレンをよそに口口は気を取り直して。

「と、とにかく！ こんな所で立ち止まっていた盗賊達に追い付かれる！ 先に進むぞ！」

今のやりとりをもっともな理由ではぐらかし、口口は暗くて狭い通路の中で足を進めようとしたが……………

「ワル……………」

「……………」

暗くて先の見えない通路で何か不気味な声が聞こえ、それは口口の正面から聞こえた。

「な、何だ……………」

その声に反応し、足を止める口口。カレンは口口の前に出て声の元を確認しようとするが。

「！ まっ、待て！」

「え？」

声の持ち主を確認しようと先に進もうとするカレンを呼び止める口口は暗闇の奥に何かを捉えたようで、険しい表情に変わっていた。

「どうやら……………お出ましましたぞ……………！」

そう口口が言くと、通路の先の暗闇の中から複数の小さな影が見えた。

遭遇

地面を這いずって歩くような、物音を発しながら、暗い通路を小さな影達は進んでいく。

「ワル！」

「！」

その声はゆっくりとカレン達の方に近付き、そして、カレン達が暗闇の中でやっと見える程度の距離からその姿を露になる……………

「こいつらが……………魔物だ……………」

「これが……………」

カレン達の目の前に現れた存在は、人々から魔物と言われている存在で、その魔物の姿はまるで、ダンゴみたいな丸状の形でそこに目と口と犬のような耳としまし模様な外見をした、とても動物には見えない生き物がそこに6匹も現れた。

「ワルワル……………ワルワル」

独特な鳴き声を放つ魔物はその丸い目でカレン達を睨み、少しずつ距離を詰めていく。

「戦う気かな……………？ やっぱり？」

「だらうな……………」

相手は人の言葉は話さないが、その小さい体から放つ殺気が語っていた。

「……………ストライク！！」

カレンは避けられない戦いだと察し、自分の魔装器の核コアもといストライクを呼び出し、ガジェットを取り出して、ストライクをガジェットーにはめ込む。

「レジREGI・INイン」

声と共にカレンの魔装器マジツギは形を形成し、盗賊達と口口と戦った時と同じ、ライトピンクな大剣が姿を現す。カレンは剣が現れるとすぐ剣を構え、警戒しながらジリジリと近付く魔物達から目を離さず、

意識を集中させ、戦闘の準備を完了させる。

「よし………いっちゃやるか………」

カレンの後ろに居る口口は肩に掛けてある鞆を探り始めた。

「ワルワル!!」

「!!」

魔物達がとうとう動き出し、先手は魔物の中から3匹が突進してきた。

「ワール!!」

突進して来た中で先頭にいた一匹の魔物が跳び上がり、口を大きく開けて、そこから外見には似合わない鋭い牙を出し、カレンの頭に向かって正面から食い掛ろうとする。

「ッ!!」

飛び上がって正面から襲い掛って来た魔物をカレンは同じく正面から剣を縦に振って打ち払い、魔物の顔面に直撃させる。

「!!」

鈍い音ではなく風船が割れたような音を出した魔物は、鳴き声を出せずに勢い良く吹き飛び、暗闇の先に消えて行った。

「ワルワール!!」

「!!」

続いて残りの2匹の魔物が左右からカレンの首の辺りを噛み付こうと跳び掛る。

「!!」

歯と歯がぶつかり合う音が響く。カレンの首を捉えた魔物2匹であったが、カレンは素早く首と腰を下げて、2匹の襲撃を避ける。

「おお! やるう!!」

感心したのか口口は歓喜の声を出す。2匹の魔物は攻撃を避けられたため、空中でお互いクロスして左右を入れ替わり、カレンの後方に着地して、カレンはすかさずそこを狙い。

「てえい!!」

魔物が着地して一旦動けない所を狙って、素早く振り向きカレンは

自分から見て左側の魔物に突進する。

「ワル！！！」

剣を横に打ち払い魔物を壁に叩きつけ、壁にめり込ませた。

「ワルワル！！！」

仲間がやられた事に腹を立てた右側に居た魔物はカレンの横から噛み付こうと跳び掛る。

「あぶねえ！！！」

「くっ！！」

腕を噛み付こうとした魔物は、距離は近かったものの、カレンは剣を両手で振り上げて間一髪で避けられる。

「ワルワル！！！」

避けられても素早く振り返って再び噛み付こうと跳び掛る魔物であったが。

「！！！」

カレンは剣を持ち直し、突進して来た魔物を横にズレテ避ける。

「せいっ！！！」

自分の目の前に入って来た魔物を剣で打ち上げる。

魔物「ワル！！！」

打ち上げられた魔物は上の壁に叩き付けられ、2匹目に倒した魔物と同じく壁に深くめり込む。

「ワルワーーーーール！！！」

「っ！！」

急に魔物の鳴き声がして、顔を左に90度に曲げて後ろを見ると、さっきまで後ろで待機していた残りの3匹の中の1匹がいつの間にかカレンの後ろに迫り、噛み付こうと跳び上がった。

「（しまった！！）」

気付くのが遅い上に後ろを取られたカレンは、体を動かす事が出来ず、魔物は大きく口を開け、その鋭い牙でカレンの頭を狙って、頭上から迫り来る。

「！！！！！」

何かが刺さった様な音がカレンの耳に響く、カレンを喰おうと跳び掛った魔物は、噛み付く前に顔の中央に何かが刺さり、カレンの目の前で絶命し地面に落ちてしまう。

「……………？」

何が起こったか分からないカレンは、魔物に噛み付かれそうになった時、顔の横を何かが通り過ぎた感じがして、その何かが来た方向に視線を向けると。

「へへ……………」

そこには、得意げに笑みを浮かべている口口の姿が在り、口口の手には弓と矢を持っていた。

「君……………」

今カレンを噛み付こうとしていた魔物に何かを刺したのは、口口の放った矢で、口口は魔物からカレンを守ってくれた。

「ワル…………ワル……………」

一方魔物は仲間が次々とやられ、残り2匹なつて、慌てふためく表情を隠せない魔物達は鳴き声が弱弱しくなっていた。

「俺様が居るって事を忘れるな！」

魔物に向かって叫び、弓を構えに標準を合わせる口口、弓糸と矢を引き、魔物の1匹を捉えたらすぐさま矢を放った。

「……！」

放たれた矢はカレンの横を通り過ぎ、真っ直ぐ伸びて1匹の魔物を顔の中央を的確に射抜いた。射抜かれた魔物は避ける事も出来ず、その横にいた魔物はまた仲間がやられて、口を開いて大きく驚く。

「……！」

口口に続いて攻撃を仕掛けようと突進するカレン、魔物は呆気を取られ反応が遅れて為、カレンの素早い接近に容易に間合いを取られ、カレンは魔物の一歩手前で大きく剣を振りかぶり。

「たあ……！」

「……！」

剣を下から上へ垂直に打ち払い、魔物は逃げる事も出来ず、そのま

まモロ顔面に直撃して、また風船の様な音を出して魔物は通路の闇の中に吹き飛んで消えて行ってしまった。

「……」
辺り見渡し、もう魔物が居ない事や倒した魔物がもう動く事がないと確認したカレンは安堵の息を漏らし、構えを解き、剣を下ろした。

「ふう……………」

「まあ…………俺様に掛ればこんなもんだなあ」

誇らしげに勝利を喜びながらカレンの隣まで来る口口。

「あれが魔物なんだね……………」

「ああ、そうだよ。お前本当に見た事ないのか？」

「……………うん」

しかめっ面で『おいおい』と呟き、頭をポリポリと掻くながらカレンをまた呆れた口口の視線は、カレンの右手に止まる。

「お前その手……………怪我してるじゃないか」

言われて見るとカレンの右手の甲に切れ目が伸びていて、そこから真っ赤な血が溢れて出ていた。

「いつの間に……………気が付かなかった」

「最初に突っ込んで来たあの3匹の魔物に付けられたんじゃないか？」

傷を付けられ事を気付かない程、戦いに集中していたカレンは、口口の指摘により初めて己の傷を発見した。

「どれ…………俺様が治してやるから、見せてみる」

「えっ？ 治すって……………どうやって？」

口口の治すという言葉に疑問を感じたカレンは、口口に視線を移した。

「いいから、その右手を出してみろって！」

「……………」

口口の言う通りに右手の甲を前に出して、口口に見せるカレン、すると口口は両手を前に出して、カレンの右手の上で手の平を開いた状態で手を翳した。

「慈悲たる心に、天からの癒しを、今ここに汝に与えん」

目を閉じて何かに祈るように唱える口口、その言葉に反応したのか、カレンと口口の周りに複数の白い色の光の珠が現れ、そして口口とカレンの手と手の間に謎の文字が書かれた白い輪のような円が現れた。

「これは……………！」

カレンはあの時、湖で出会った少女が同じような物を出した事を脳裏に思い浮かぶ。

「ヒール！」

「！」

『まるで何かを呼ぶようにヒール』と叫ぶと、口口とカレンの手と手の間に在った白い輪のような円が眩い光を放ち、瞬く間にその光は一瞬で消えて、白い円も周りに浮かんでいた白い光の珠も消えていた。

「どうだ？ 治ったろ？」

「え？ あっ！」

右手の甲を見てみると、切れ目が無くなり、傷跡も血も綺麗さっぱりに消えていた。

「すごい……………」

何が起こったか分からないが、驚きと感動を覚えたカレンは、治った右手をあらゆる角度から見直した。そんなカレンを口口は。

「お前……………まさか魔法も知らないのか……………」

また怪訝そうな顔でカレンを尋ねる口口

「えっ？ 魔法って？」

大体予測が着いていたのか、口口は「やっぱりか」と呟き、もう溜息など尽きた様な引きついた表情だった。

「魔物を知らない、ストーカーって言葉も知らない、魔法も知らない……………お前って一体何なんだ……………」

「？」

急に言葉を止め、考え込むように黙り込んだ口口。カレンは急に黙

り込んだ口口の顔を覗いた。

「まさか……………お前……………！」

何かに気付いたのか口口は、カレンに指を指す、カレンは口口の態度に思わず生唾を呑む。

「お前……………俺よりも田舎者だなあ！！」

「えっ？」

何を言い出すかと思いきや口口は見当違いの勘違いをした発言にカレンを啞然とさせる。

「そうかそうか！ 俺達の村より田舎だったら仕方ないな！」

一人で妙に納得した口口はカレンを自分よりも田舎者だと勘違いをしていた。

「いや……………僕は……………」

「そうゆう事なら、お前より何でも知っている俺様が、手取り足取り教えなきゃな！」

天井を見上げて『あつはつはつ』とまるで自分が偉いかの様に高笑いし、カレンの声は口口の耳に届いてはいなかった。

「いや……………だから……………」

「オシ！ 俺様は優しいからな！ 直々にお前の知らない事を沢山教えてやるから感謝しろよ！」

勝手に話を進める口口はもうカレンの声など全く耳に入っていないなかつた。

「ん？ そういえば、何か忘れているような……………？」

そんなカレンをよそに何か重要な事を忘れてかけていた口口は、首をすくめた。

「あつ！ そうだ、こんな所に立ち止まっている場合じゃなかった！ おい！ 早く先に進むぞ！」

盗賊達の事を思い出した、口口は再び走り出し、カレンに急いで先に進むよう呼び掛けた。

「……………あつ！ うん！」

先に走り出した口口を追い掛けて、走り出すカレンは自分が記録喪失だという事はゆっくり話せる時に話そうと心の中で思いながら、魔装器もとい大剣を背中に背負って、口口の後を追った……………

分かれ道

.....盗賊達に追われて、洞窟内に逃げ込んで大分時間が経っている中、カレン達は暗くて狭くて長い通路をひたすら前に進み続けていた。

「ねえ.....この洞窟は後どれ位進めば出られるの？」

後を付けていたカレンは口口の隣まで近付く。

「そうだな、俺の村の話によるとこの洞窟を脱け出すのに最低でも一時間掛るって、言ってるなあ」

「そんなに？」

そこまで時間が掛るとは思わなかったカレンは、口口に言葉に耳を疑う。

「まあ、この洞窟は上に在る、運河や山々の下を通り抜けているからなあ、そんなに時間が掛っても不思議じゃない」

「そうなんだ.....」

走りながらこの洞窟の構造をあやふやに想像するカレンに、口口はカレンの顔を見てニヤニヤ笑う。

「？ どうしたの？」

「いや.....まさか俺様よりも田舎者が居ると思うと.....」
口を押さえ、笑いを堪える口口、カレンは何故、口口が笑うのかを理解する事など出来なかった。

「まあ、田舎者だから仕方ねえか！」

「？」

急に機嫌が良くなった口口は、カレンより前に出る。

「しかし、お前.....いや、そういえばお前の名前を聞いていなかったなあ？」

今になって口口はカレンの名前を聞いていなかった事ようやくに気付く。走る速度を下げ、カレンの方に顔を向く。

「お前、名前は？」

「カレン」

「『カレン』？　なんか女っぽい名前だな」

「女っぽい？」

走る速度を下げた口口と同じく速度を下げたカレンは、自分の名前が『女っぽい』という言葉の意味に首を傾げる。

「『カレン』っていう名前は、そんなに女の子っぽい？」

「そりゃあ、そうだろ！　『カレン』なんて女の名前か花の名前だぞ」

「花？」

花という単語に反応するカレン。

「何て言っただけなあ、確か名前が……………なんちゃらカレンだったようない……………」

「『なんちゃらカレン』って言う名前なの？」

「いや違う！　その『カレン』って言う先の名前が思い出せねえんだよ！」

カレンの天然ボケに素早く突っ込む口口。

「そうなんだ……………」

「そうなんだって……………お前、自分の名前がどうやって付けられたのか分からないのか？」

記録喪失なので、ブレスレットに刻まれた名前を自分のだと思っているカレンは、自分の名前が何を元に付けられたのか分からないので、口口の問いには答えられる訳が無く。

「それは……………分からない」

「……………？」

口に出したカレンの答えは、何処か重くて暗いような感じで、口口は何か聞いてはいけない事だと悟り。

「まあ……………名前なんて人それぞれだもん！　はっはっはっは」

笑ってカレンを励まそうとする口口は、カレンが落ち込んでいると勘違いをしていた。

「あ！ そうだ！ 俺様の名前はロロ・グライヴィー！ 前にも言
ったが『カムーシャ』のバンチョーだ！」

その場をはぐらかそうとロロは自身の自己紹介を始めた。

「ああ、知っているよ。イミナちゃんから聞いたよ」

「何！ イミナから！？」

自身の自己紹介をした途端、カレンは自分の事を妹から教えられ知
った事に驚くロロ。

「イミナちゃんから。僕の事を聞いていないの？」

「聞いている訳ないだろ！ 俺が目覚まして妹にお前が何処に行っ
たか聞いてだけで、それ以外は何も聞かず、急いで準備して出て行
ったんだからな！」

「どうしてそこまで？」

「お前との決着を付けるためって、言っただろう！」

忘れていた訳じゃないが、ロロの突っ込みで確かそんな事を言っ
ていた事を思い出すカレン。

「そつえば、そうだったね」

「ハア……………、お前が盗賊に追われている事が分かっていたら、
わざわざこんな所まで追っかけて来なかったのに……………」

溜息を吐いて、自らの行いを後悔するロロをよそにカレンはある事
について尋ねる。

「ところで、魔法って僕でも使えるの？」

「ああ？ 何だよ急に？」

唐突に話題を変えて来たカレンにロロは眉を吊り上げ。

「いや、僕も使えるかなあ……………」

「確かにお前にも使えるかも知れないが、簡単に使える物じゃない
んだぞ！ 特に魔法に使う『マナ』をうまくコントロール出来ない
奴はな！」

「『マナ』？」

「…………… やっぱり『マナ』も知らないのか……………」
溜息混じりに呟やくロロ。

「『マナ』って言うのは、全ての生物に宿る命の源の事だよ！」

「命の源？」

「そうだ！ 俺たちがこうやって生きているのも、俺たちと言う生物が生まれたのも、この世界が出来たのも、全て『マナ』の御陰なんだ！」

両手を広げ、『マナ』の偉大さをアピールするロロ。

「その『マナ』って言うのは、僕にも在るの？」

「当たり前だろ！ 俺にもお前にも体の中に『マナ』が在るんだ」
「体の中に？」

体の中に在ると聞いて胸に手を当てるカレン。

「俺達の体の中に『マナ』が在るから、俺達は今こうやって生きていられるんだ。その『マナ』を消費して、魔法が使えるんだよ」

「『マナ』を消費？」

「もつと詳しく言えば、何かをする時も、何かを生み出す時も、生きている事すらも、あらゆる事に『マナ』を消費しているんだ」
走りながら淡々と説明を続けていたロロは、自分の足に指を指す。

「俺とお前が今こうやって、走っていられる体力も『マナ』に関係しているんだ」

「体力も『マナ』に？」

「体力だけじゃない、気力も精神力も『マナ』に関係しているんだ」
説明を少しずつ理解しつつあったカレンは、ロロの話を聞き続ける。
「そしてこれらを司る『マナ』を『力のマナ』って言うだ」

「『力のマナ』……………？」

「その『力のマナ』を消費して、魔法が使えるって訳だ」
説明が終わったみたいで、ロロの口が止まる。

「……………」

「どうだ？ わかったか？」

魔法やマナについての説明が終わって考え込むカレンに、ロロは心配そうに顔をのぞみ込む。

「うん……………何となく分かったよ」

「！　そうか！　やっぱり俺様の説明は分かり易かったか～～～！」
「？」

言葉の割には何処か安心した表情を見せる口口にカレンはその表情の意味を理解する事はできなかった。

「あっ！」

「ん？」

走りながら続けていた話が終わった矢先にカレン達の前に、二つの分かれ道が視界に入ってきて来て、二人はその前に足を止める。

「分かれ道かよ……………」

厄介な物に出会ったみたいに眉が下がる口口。

「どっちに進む？」

「う～～～ん……………そうだな～～～」

顎に手を当てて、分かれ道を観察する口口。

「お前ならどっちにする？」

「僕？　……………そうだな～～～？」

口口に振られ、同じく顎に手を当てて、分かれ道をじっくり見るカレン。

「う～～～ん……………右かな？」

考えた結果、右の道に指を指すカレン。

「おお、右か！？　俺もちょうど右かな～～～っと、思った所だ！」

どうやら口口も同じ道を考えていた様で、意見が重なったのが少し嬉しかったのか。口口は妙にテンションが上がった。

「じゃあ、お互い右って事で、右の道を行くぞ～～～！」

「うん」

特に異論は無く、テンションが上がった口口に相槌を打つカレンは、口口と共に右の道へ足を運んだ。

「お？」

右の道を歩いて、そう経たない内に今まで見て来た狭い通路とは違う、少し広がった空間の中に入っていた。

「此処は何だろう？」

その空間は、円状様な形に成っていて、見渡す限り来た道以外は全て壁に覆われていた。

「なんだなんだ？ 行き止まりかよ？」

たどり着いた円状の空間は行き止まりだと落胆する口口。

「どうする？」

「戻るに決まってるだろ！ さっき選ばなかった左の道に行くんだよ！」

振り向いて来た道を戻ろうとする口口だったが………

不意を突くように空間内に何かが鈍く軋む音が響く

「！」

突然、耳に聞こえた不吉な音に足を止める口口、その音が響いた後に続いてか洞窟内が激しく揺れ始めた。

「ッ！」

「な、何だよ！？」

激しく地面が揺れる事に動揺するカレンと口口に追い打ちするかのように、カレン達の来た道が揺れによって空間の壁が崩れ落ちて塞がってしまう。

「なっ！？」

「げげっ！？」

洞窟内の激しい揺れはまだ続き、カレン達の動揺を更に大きくしていく、すると揺れの音に混じって何か別の音がカレン達の耳に入った。

迫り来る水

揺れ動く狭い空間内で響く振動音とは違う、もっと別な音が聞こえたカレン達はその音が何処から発生しているのかが分からず、困惑していた。

「（何だ？ この音は！？）」

「！！ ま、まさか！？」

音の発生位置はまだ特定できないが、音の正体を察した口口は顔が青ざめる。

「！！」

音の発生源を探そうと空間内を見渡したら、さっき崩れ落ちた壁の所に穴が出来ていると気付いたカレンと口口は、その穴の中から揺れの音に混じっている違う音が出ている事も同時に気付く。

そして、それに気付いた直後……………

「！！！！？」

突如、壁の穴から莫大な量の水が怒涛の勢いで噴射のように放水を始め、カレン達の居る円状の壁の空間を水浸しにする。

「くっ！！」

「ブハっ！！」

出る水の量は激しく、噴射している水の着地点の近くに居たカレンと口口は大量の水を被りながらも、何とかその場から離れ、今は壁の瓦礫に埋まっている、来た入口の反対側の壁に寄り添う。

「おいおい！ や、やべえー！ーぞ！！」

「……………！！」

入口が塞がれた為、空間内は瓶に蓋をしたような状態になり、穴から出てくる大量の水が空間内に押し寄せて来る。

「み……………水が！」

時間が経つ事にみると空間内が水で溢れ、もうカレン達の足を浸す位に満たしていた。

「こ、このままじゃ、溺れ死んじまうよー！ー！！」

「……………」

唐突な非常事態にパニックになっている口口とは反対に、冷静に落ち着いているカレンは空間内を見渡していた。

「あつ！」

そして、カレンは何かを見つけ、上に方に指を指す。

「ねえ！ あれ！！」

「えっ？」

声に釣られ、カレンの指を指している方向に目を向ける口口は、意外な物が目に入る。

「あれは！！」

指が指した所には、もう一つの大きな穴が在り、それはカレン達が背にしていた壁のかなり上の方にぽっかり空いていた。

「あれで、ここから出られるのか！？」

「分からない！ でももし出られるとしたらあそこしか無い！」

「よ、よし！」

その穴に懸けたのか、腰に掛けてある鞆に手を突っ込む口口、ちなみにその穴はカレン達の居る所から15メートル位の高さに在り、とても人の力で跳び移る高さでは無かった。だからこそ口口はある物を取り出す。

「あつたあつた！ これで！」

鞆から取り出したのは、長い紐に手の大きさ位の鉄の爪が着いた物だった。口口はそれを上空の壁に在る大きい穴に向かって、鉄の爪を放り飛ばす。

「届け！」

鉄の爪は紐を引っ張りながら上へぐんぐんと伸び、穴の手前に当たる。

「やった！」

鉄の爪は穴の手前に刺さり込み、カレンは心の中でガッツポーズを決める。

「大丈夫だな!? うん!」

爪が外れないか、刺さり具合を確かめる口口は、鉄の爪が外れないと確信すると。

「よし! じゃあ最初は俺様から——」

言い終わる直前、不意に水が弾け飛ぶような音が複数に鳴り響き、カレン達はその音が今でも穴から勢い良く出ている水の着地地点の近くから聞こえたを知る。

「な、何?」

「今度は、何だよ?」

カレンと弱気な声を出す口口は振り向いて音の正体を確かめると、そこには……

「プルルルルル!」

「!」

そこには、白いウロコと触覚のような目、そして鋭いハサミを持った謎の生物が複数にそこに居て、甲高い鳴き声を出しながらカレン達を威嚇していた。

「また……魔物……?」

「勘弁してくれよ!」

またもや予想外の展開に戸惑うカレン達に対して魔物達は水が溢れているこの空間内でまるで魚のように水中の中でぴたりと動かず、カレン達の様子を窺っていた。

「動かないね……?」

「たぶん……こつち様子を窺っているんだ!」

魔物達の様子に気付いたカレン達であったが、空間内の水がカレン達の膝の所まで溢れて来て、カレン達の不安をより一層に深める。

「……君は先に登って!」

「ええっ? いや、それは有り難いが……」

思いもしない申し出に有り難みを感じながらも躊躇する口口。

「二人一緒に登っていたら、魔物からの攻撃を防げない。だから誰かが先に登って、後に登る人の手伝いをしなきゃ、二人とも登れな

い！」

記録喪失であることにも関わらずこの状況で最も最善な案を出したカレンに、口口は元々自分から先に登ろうと思っていたが、カレンの提案に心打たれ。

「……………分かった！ 俺が先に登って、後から登るお前をキツチリと援護してやる！」

「うん！ お願い！」

「頼んだぞ！」

危機的状況の中、口口はお互いの協力が不可欠だという事を身に染みて理解した。そしてカレンは魔物の方に視線を戻す。

「（魔物は……………5匹！）」

観察して見た所魔物は5匹、体格は前に遭遇した魔物とたいして変わらない大きさであり、そして前の魔物と同じ位の殺気を放っているのをカレンは肌で感じた。

「よっ……………つと！」

真後ろの壁の上の穴から伸びている紐を伝って登り始めた口口と魔物が口口に襲いかからないように、口口の後ろを守るためと魔物を引き付けるために背中に背負っていた魔装器もとい大剣を下ろして構えるカレン。

「……………」

「ブルルルル……………」

黙って魔物達の様子を窺うカレンと今でもカレン達を睨み、じつと動かない魔物達。お互い相手の出方を窺っているようだが、刻々と空間内の水が溢れている状況で、このまま時間が過ぎて行けば、カレンが一方的に不利になる事は目に見えていた。

「（このままじつとしてたら、こっちが危ない……………ならっ！）」

剣を後ろの方に振り被り、刃先に力を溜めて……………

「剛魔……………」

叫び声と共に剣を横に振り下ろし、振り下ろされた剣は大きな風の

波を作って、波は衝撃波と成って、魔物の方に飛ぶ。

「！！！」

先制攻撃の衝撃波は魔物達に直撃し、空間内に響き渡る爆音と共に水柱と水しぶきが飛び立つ。

「ップルルルルル！！」「」「」

「！！」

水柱が立ったせいで、魔物達がどうなったのか確認出来なかったが、5匹居た魔物の中の内3匹が、水柱が引いた直後に水中から飛び出し、鋭いハサミを開いてカレンに襲い掛って来た。

「ッ！！！」

足が半分水に浸っているせいで、陸とは違い、水が動くのを邪魔して、魔物の攻撃を回避できなくなってしまい、カレンは迫ってくる魔物を正面から立ち向かって対処するしか無かった。

「周体斬^{しゅうたいざん}！！」

足に力のような物を流し込み、右足を軸にして、カレンは高速回転を行い片手で剣を振り回わした。

「ッ！！！！！！」「」

高速回転したカレンの周りの水は渦となり、襲い掛った魔物達は渦を作った高速回転して勢いが付いた剣に弾き飛ばされ、壁に叩きつけられる。

「おお！ す、すげえ！」

登りながら戦いの様子を見ていた口口は感心の声を出した。

「……………」

回転を辞め、辺りを見渡す、最初に衝撃波を喰らった2匹の魔物は水の上に浮かびながらピクリとも動かず、壁に叩きつけられた魔物も同じく、魔物達が動かないと確認して、もう安全かなと思ったカレンであつたが……………

「ん？」

穴から出ている水の中から小さい何かの影が見え、その影は次の瞬間にカレンの目に姿を現す。

「プルルルルル!!」

「なっ!!」

「安心かと思つた矢先にまた水を噴射している穴から、同じ魔物がまた出て来てカレンは動揺する。そして更に穴の水からまた影が現れ。」

「プルルルルル!!」

「追い打ちを掛けるように、更に魔物が次々と出現し、数は当初の5匹から3倍の15匹に跳ね上がった。」

「く……………」

「数匹の魔物なら対処は出来るが、数が圧倒的に開いた上に空間内に溢れる水はカレンの下半身の全てを浸す程に溢れていた。次々と起こる出来事にカレンの不安を強めて行く。」

「プルルルルル……………」

「地の利を得ている魔物達は、自分達の数を利用し、囲みながらカレンとの距離を少しずつ縮めながら近づいてくる。」

「く……………」

「刹那……………突如、矢が3本同時に飛んできて、魔物をそれぞれ3匹を射抜く。」

「!!」

「矢は上から降つて来て、カレンは矢が飛んで来た方向に顔を向けると。」

「おい! 早く登れ!!」

「その矢を放つたのは、もう壁を登り終えて、穴の中から弓で魔物を射抜いた口口であつた。」

「あつ! うん!!」

「口口が登り終えて、自分が登る番が来たと分かつたカレンは、魔物達の方に顔を戻して剣を振り被り、刃先に力を溜め。」

「剛魔!!!!」

「振り下ろした剣が放した衝撃波は魔物数匹に直撃し、大きな爆音と共に水柱を作る。そして、カレンはその隙に急いで上に登る為の紐

を手に取り、登り始めた。

「プルルルルル！！」

「！！」

登り始めてそう経たない内に水柱が引いて、魔物の一匹が飛び跳ね、登っているカレンの後ろを襲い掛かる。

「！！」

しかし、襲い掛かって来た魔物はカレンに届く前に口口が放った一本の矢に射抜かれ、力尽きてそのまま下に落ちる。

「ありがとう！」

「礼はいいから、さつさと登れ！」

礼を言つて顔を上げると魔物からカレンを守るため、矢を放ち、魔物の数を減らしていく口口。カレンはそんな口口の働きを無駄にしないためにも登る早さを強めた。

「プルルルルルル！！！！」

次々とカレンに跳びはねて襲い掛かる魔物達であつたが……………

「やらせつかよ！！」

器用に矢を素早く補充しながら、口口は魔物達を次々と撃ち落とす。

「ついでに、これも喰らえ！！」

そう言つと口口は一本の矢に『力のマナ』を流して、『マナ』が流れた矢は刃の部分に赤いにオーラが宿つた。

「すいせい彗星！！」

放たれた赤いオーラを纏つた矢は、普通に放たれた矢よりに比べ物にならない程に早くで一匹の魔物を射抜く。

「！！！！」

赤いオーラを纏つた矢に射抜かれた魔物が当然赤い光を放つて爆発し、近くに居た魔物2匹も爆発に巻き込まれ、水しぶきを起こす。

「……………！！」

何が起こつた分からないカレンであつたが、15匹だった魔物達がいつの間にか4匹になっており、魔物達も怯み、そして登っていたカレンも穴からあと少しだった。

「あともう少しだ！ 踏ん張れ！」

魔物達がもう飛び上がったも届かない距離だと悟ったロロは、矢を撃つのを辞め、地面に体を着いて穴先から手を下に伸ばす。

「うん！」

カレンも上に手を伸ばしてロロの手を取る。

「ふんぐうー！」

カレンの手をしっかりと掴んだロロは、歯を食い縛りながら、力いっぱいカレンの体を引っ張り上げる。

「よいしょ……………っと」

ロロの力も借りてやっと穴の中にたどり着いたカレンはロロと共に安堵の息を漏らす。そしてカレンは穴の中を見渡すと。

「……………どうやら、奥に繋がっているみたいだね？」

顔を上げて、穴の奥に道が続いている事を目で確かめたカレンはゆっくり腰を上げる。

「ああ、そうみたいだ！」

相槌を打ちながらロロは、鞆の中から爆弾を取り出す。

「それは……………！」

見覚えがあるそれは、『カムーシャ』村でロロとカレンが戦った時に、ロロが使っていたロロ特製お手軽爆弾であった。

「これでも……………喰らえー！」

取り出した数個の爆弾の導火線に火を付けて、まだ空間内に居る残りの魔物達に投げ込む。

「よし！ 逃げるぞ」

「あ！ 待って！」

爆弾を投げてすぐさま振り返り、穴の奥に走りだしたロロと後に付いて行くカレン。投げ込まれた爆弾は空間内の水の中に入り込み、カレン達が穴の奥に向かってそう経たない内に……………

空間内の方から強い耳鳴りを起こす程の大きな爆発音が響きく。

「！」

その聞き覚えのある爆音にカレンは走りながら後ろを振り向く。

「これであの魔物達も、もう追っかけてこれねえだろ！」

自分の爆弾が役に立ったと笑みを浮かべる口口。

「あの爆弾を喰らったら、只じゃあ……すまねえからな！」

「……………そうだね」

あの爆弾の威力を身に染みて理解している口口だからこそ、分かる事の様だとカレンは心の中でそう察した。すると口口は走っている中、急に息が荒くなり、顔から元気が無くなっていくように疲れた顔に変わっていった。

「ハア……………もう……………だめだ……………」

段々と走る速度が落ちて行く口口はとうとう立ち止まり、息が乱れように激しい息遣いをして、顔を下げ、腰を低くして両手をそれぞれ両膝に置く。

「どうしたの？ 大丈夫！？」

後を付いていたカレンは口口の様子が変だと気付いて、口口の隣に止まり、下から顔を覗み込んだ。

休憩

顔色は正常だったが、表情は如何にも苦しそうで、額から数本の汗が垂れ流れ、口と鼻の息は荒れて、呼吸が随分と乱れていた。

「ハア……ハア、緊張が解けたせいで、疲れが一気に出たみたいだ………」

思いもしない出来事が立て続けで起こったせいで、精神的にも身体的にも過労したようで、体に限界が来た口口は、もう走る事は出来なかった。

「本当に大丈夫？」

体の具合を心配するカレンは、口口に体の安否を尋ねる。

「心配すんな、歩きながら体力を戻すさ」

問いに対し、強情を張って返した口口は体を立て直し、歩きながら前に進む。カレンは口口が強情を張っているのが余計に心配になり、隣を歩きながら後を付いて行った。

「しかし………お前、見掛けによらず結構戦い慣れてんだなあ」

「えっ？」

不意に口口がカレンに話を振り掛ける。

「だってよ、俺様と戦った時も、魔物達と戦った時も、妙に戦い慣れた動きだったぞ」

「そ、そう？」

「ああ」

「そっか………」

そう言われてみると確かに思い当たる所があると頭の中で浮かんだカレンは、手を顎の所に当てる。

「所でお前の技って………」

「………」

話を続ける口口をよそにカレンは、指摘されて初めて、自分の動きが戦い慣れている事に気付かされ、疑問を浮かべ、何故自分が戦い

慣れているのか考え始めた。

「（そういえば、何でなんだろう？ あの盗賊の人達と戦った時も体が勝手に動いて……………、さっきの戦いもそうだ……………」

頭の中で、今までの戦いの光景を思い出し、自分が使っていた技の事を思い浮かべる。

「（あの技はやっぱり、僕が記憶を失う前に使っていた技なのかな？）」

自分の失った記憶の中で、体だけは戦いの動きを覚えている事に知ったカレンであったが。

「おい！ 聞いてんのか！？」

「あっ……………」

考え事に周りの声が耳に届いていなかったカレンは、やっと口口の声に気付く。

「な……………に、ボー……………としてんだ？」

「ご、ごめん、ちょっと考え事があった……………」

「しょうがねえな……………、もう一回言っぞ」

軽く息を吐いた口口は、再び口を開く。

「お前の技にも俺の技にも、『マナ』を使っている事は知ってるか？」

「僕の技に、『マナ』を使っている？」

意味が分かるようで分からないカレンは、目を細める。

「前にも言った通り、どんな事をする時も体内の『マナ』を消費しているんだ。技も例外じゃねえ」

「それって、君が言っていた『力のマナ』の事？」

『マナ』についての知識に乏しいカレンは、口口が前に説明した『力のマナ』の事を思い浮かべ口に出す。

「まあそうだ、どうやって使っているか、分かりやすく言うとな……………」

……………」
考え込むように、口を閉じる口口。そして少しの間の後、その口を

開ける。

「つまりだな、さっきの戦いで俺が使った『彗星』っていう技は、俺が矢の刃に『力のマナ』を流し込んで、その矢は『マナ』のお陰で通常の何倍のスピードで飛ぶ事が出来るんだ。しかも、射抜いた標的の体の中に『マナ』を残して、その残った『マナ』は風船みたいに膨れ上がって、ボン！　と爆発するって訳だ！」

説明を分かり安くするように両手をグーにして、パツと手を開いて爆発を表現するロロ。

「そんな事ができるんだ……………」

『マナ』に隠された力がある事に驚くカレンは、自分の技の事を思い出す。

「じゃあ……………僕が使った技も？」

「だから言っただろ？　お前の使った技にも『マナ』を使ってるって……………」

今更になってやっと気付いたカレンに呆れそうになったロロは、溜息が喉から出てきそうところで辞め、話を続ける。

「つまり、どんな技にも『マナ』を使ってるって事だ！」

「どんな技にもか……………」

『マナ』について新しく知識を得たカレンは、ロロの方に視線を向けると、ロロの鞆から少しはみ出ている弓に目が止まる。

「そういえば、君は爆弾以外にも弓が使えたんだね」

「な、なんだよ、いきなり」

唐突に話題を変えたカレンに、戸惑うように猫のような耳をピコピコさせながら目を丸くするロロ。

「だって、『カム―シャ』で戦った時は、そんなの使ってたなかったよね？」

鞆からはみ出ている弓に指を指して、ロロに尋ねるカレン。

「でもすごいな……………弓矢で魔物に一回も外さず倒せるなんて」

「ま、まあな！　物作りは得意だが、射撃はもって得意だぞ！」

尊敬の眼差しで純粋に褒めてくるカレンに自慢げに人差し指で鼻の

下を擦るロロは、自分の特技を明かす。

「何で、使わなかったの？」

「あ？」

「だから、何で、村で戦った時に弓矢を使わなかったの？」

どうやらカレンは、『カムーシャ』でのあの時の戦いで、どうして弓矢を使わなかったのかという素朴な疑問を抱いたようだ。

「あ〜〜〜」……………それはだな」

「それは？」

「それは……………」

「……………」

何故か焦らすように躊躇って口を開かないロロにカレンは何の違和感を感じず、ロロの口から答えが出るのを待っている。そしてロロはその固く閉ざした口をようやく開く。

「く、苦勞して作った自信作の爆弾を自慢したくて、誰でもいいからその爆弾の威力を見せ付けてやりたかったんだ、ついでに実戦結果も……………」

「……………」

「お前に戦いを申し込んだのは、お前を偶然近くで見掛けたからで、弓矢を使わなかったのは、爆弾が完成したから、つい忘れていたからで……………」

「……………」

「まあつまりだな……………要約すると」

そして、ロロは空気が重くなったその場で、勇気を出して告白する。

「つまり……………全部、勢いなんだ……………」

「……………なるほど」

「……………」

「……………」

「？」

理由が分かったカレンだったが、それ以上何も言わず、ロロはカレンの反応にキョトンとする。

「お、怒っていないのか？」

「え、何が？」

まるで何も感じては、いないようにカレンは口口の問いの意味を理解してはいなかった。

「いや、だから……………俺の勢いだけの行動を怒っていないのか！？」

「怒る？ 何で？」

「何でって、おまえ……………」

呆れて物を言えない口口はカレンの態度に心底呆れ、今までの中で最大の溜息を出す。

カレン「そんなに怒って欲しいの？」

自分のせいで呆れられている事に気付かず、カレンは口口の大きい溜息が気になり、上目遣いで尋ねる。

「もういいよ……………」

「？」

結局カレンは口口の溜息の理由が分からず、歩きながらの会話が終わった矢先に、二人の目に微かな光が映る。

「あれ？ 何か先に光が見えるね？」

その光は白く輝き、光はカレン達が進んでいる通路の先から見え、同時に水が流れる音が聞こえてくる。

「出口かな？」

「とにかく行ってみようぜ！」

期待を胸に抱いて、白い光が指す方に駆け込むカレンと口口は、その光の先に入り込む。

「ここは……………」

光が発する所まで来たカレン達の目に入って来たのは、前に見た円状の壁だけの空間と同じような形状の空間に入っていた。

「また似たような所が……………」

愚痴を零しながらも辺り一帯を見渡す口口とカレン。この空間は前の空間とは違い、カレン達から見て、まっすぐ行った先の奥に通路

と思わしき穴が在り、そしてこの円状の空間の片隅に泉のような大きな水の溜まり場が在り、その上から滝のように大量の水が流れていた。

「この光は……………」

この空間内を照らす白い光に空間内の壁や地面から至る所から放ち、その光は大小とそれぞれ大きさが異なっていた。

「浄化石か……………」

フッと呟いた口口の発言に気付いたカレンは、首を傾げながら口口に視線を移す。

「浄化石？」

「奇石類の浄化石だよ！ 知らないのか？」

首を縦に振って頷くカレンに対し、口口は顔にシワを寄せながら、気が抜けた様な目でカレンを睨む。

「奇石も知らないって、お前…………… どんだけ田舎者だよ！？」

「？」

今更だがカレンの常識知らずに呆れを通り超えて、怒りに成った感情を露わにする口口であったが、何を怒っているのか分からないカレンに対しては虚しくも空振りに終わってしまう。

「はあ…………… もう疲れた！ 此処で休憩するぞ！」

疲れて半分やけくそになった口口は、泉のような水の溜まり場の近くまで歩き、その場でしゃがみ込み、胡坐を掻きながら休憩を宣言する。

「此処で立ち止まっていいの？」

休憩体形に入った口口に近づくカレンは、自分達の置かれた状況に對して、此処で休憩する事に疑問を感じた。

「このまま、休憩しないで先に進んでいたら、俺がくたばっちゃう！」

カラ元気な声で自分には休憩が必要だと訴える口口。

「どんな生物でも適度な休憩が必要なんだよ！」

体力や精神にもピークが来ている今の口口にとって、休憩はとても

魅力的で必然的に求めている物だった。

「……………」

休憩は確かに今のロロには必要だと思ったカレンの気持ちに対し、一刻も早く目的の少女にペンダントを渡さなければならぬという元々在った気持ち、今の気持ちと葛藤し合い、カレンは眉を下げながら顔を堅くして悩んだ。それを察したのかロロは。

「何もそんなに焦らなくていいだろ？　ちょっと時間が経ったくらいでその女に追い付けないって訳にはならねーぜ、きつと」

悩むカレンに助言を言うロロ。そのカレンは意外そうな顔でロロの言葉に耳を傾ける。

「要はそいつに追い付けば、良い話だろ？　そんなに悩むなよ！」

「……………」そうだね」

助言のおかげか、さっきまでの堅くなっていた顔が、柔らかい笑顔になり、カレンもロロと一緒に地面にしゃがみ込み、ロロの隣で休憩を取る。

カレン「此処で休憩するよ」

その言葉を聞いたロロは、安心したかのように顔に笑みを浮かべ、地面に大の字になって寝っ転がる。

「（ぐううう……………）」

「？」

「……………」

直後に何処かで聞いたような気が抜ける音が聞こえ、カレンはその音が聞こえた方向、隣に居るロロの方に顔を向けると、ロロは頬を少し赤くして何食わぬ顔をしていた。

「そっいえば……………昼に何も食ってなかったな……………」
自分のお腹を擦って、空腹を自白するロロ。

「でも今は、食材なんて物は一切持っていないんだよね……………」

「……………」

空腹に悩まされているロロを見て、カレンは自分の腰にぶら下げている、商人のコルトから貰った、本と食材と赤い色のゼリーのよう

な物が入った布の袋の事を思い出し、それを手に取り。

「これ……………商人のコルトさんって言う人から貰ったんだけど」
寝っ転がっているロロに見えるように、袋の口を出来る限り広げ、
ロロに差出す。

「おお！？　これは！」

目を見開き、上半身だけを起こして、袋に手をつ突っ込んで中身を確認する。

「何だよ！？　こういう物を持つてるなら早く言えよ！」
瞳を輝かせ、ヨダレが垂れそうなニヤけ顔で袋の中の食材を見詰めるロロ。

「この先、何かの役に立つかもしれないから持って行けって、その人に貰ったんだ」

この発言にロロの体はピタリと止まり、さっきまでニヤけ顔が消え、
神妙な表情でカレンの顔を見る。

「いいのか？　これ……………お前の為にあげた物だろ？」
例え貰った物でも、カレンの為にあげた物なら、それを他人である
自分が使っているのかをカレンに問うロロ。

「良いよ、君がお腹を空かせているなら、使っていいよ」

と何の躊躇も無く、ロロに使用を勧めるカレン。

「本当にいいのか？」

「良いんだよ。コルトさんは何かの役に立たせるために僕にあげた
なら、まず君の空腹を無くすために役に立たせたいんだ」

自分の為だけでは無く、誰かの為に役に立たせる事も含まれている
と思ったカレンは、ロロの為に使っても何の問題も無いと判断し、
快くロロにあげる事を選んだ。

浄化石

陳腐な嘘偽りなんて物は完全に感じない、思いやりのあるカレンの優しい一面を目の当たりにした、ロロは面を喰らったかのように呆けてしまう。

「お前……………」

意表を突かれたかロロは、目を丸くし、腑抜けた顔で呆気を取られたが、すぐその後、苦笑いを浮かべ、そして今度は清ました顔に変わり。

「サンキューな！　じゃあ、ちょっと待ってろ！」

さっきまでの真剣な表情は何処かに消え、カレンの手に在った袋を手に取り、中身を探る。

「これと……………あとこれと……………、おお！　これも在るのか！」

嬉しさうに笑みを浮かべ、袋の中から四角形のパンと丸く切り取られたハムと瓶に入ったケチャップを取り出す。

「何を作るの？」

「良いから、見てろって！」

まずロロは、丸く切り取れたハムをパンと同じ位の厚さに2枚切り、ケチャップの瓶のフタを取って、その切った二つハムの表と裏にケチャップを適量に塗り、そして二つのそれぞれのハムを四角形のパンとパンの間に挟み込んで。

「ほら！　？サンドイッチ？の完成！」

「？サンドイッチ？」

「この料理の名前だよ！　ほい！」

完成した内の1枚のサンドイッチをカレンに差出し、もう1枚は自分の片手に持つロロ。

「お前の分だよ」

「あ、ありがとう」

自分の分を用意してくれた事に驚きつつサンドイッチを受け取り、

カレンは作ってくれた口口に礼を言う。

「いただきます」

二人は食事の挨拶を行ない、サンドイッチを口に運ぶ。

「あ……………おいしい……………！」

「だろ？」

おいしい物に有り付けた二人は微笑ましそうに笑い、その後、黙々と食事を行ない、二つのサンドイッチはそれぞれの胃袋に消えて行った。

「ふう、少しは腹の足しになったな」

「うん、おいしかったよ」

お腹を擦って、空腹から逃れた事に安心する口口と素直においしいと伝えるカレン。

「よつと」

急に起き上がった口口は、上から水が流れている泉の端に近付き、そこにしゃがみ込んで、両手で溜まり場の水をすくい上げ、その水を飲み込む。

「プハー！ 生き返る〜〜〜！」

喉が渴いていたのか、口口は歓喜の声を出す。その声に釣られ、カレンも起き上がり、泉の端に傍に近付く。

「おいしいの？」

「うめえよ！ お前も飲んでみるよ！」

どうやら口口には好評なようで、カレンは口口の勧めでその場をしゃがみ込み、泉の中の水を覗いてみる。泉の中は白い光を発する石が無数に在り、石のおかげで中は明るく、水は何の濁りも汚れもなく、透明で綺麗な水だった。

「……………」

その透き通った水を口口と同じ両手で水をすくい上げようとするカレン。水はひんやりと冷たく、肌に潤いを与え、両手に満たされたその水はまるで宝石の様に輝いていた。そしてじっくりと観賞したカレンは、ゆっくりと水を口に運び、飲み干す。

「（あれ？ この味……………」

「ん？ どうした？」

飲み終えたカレンの顔が何かに気付いたような表情して、口口はそれが気に止まり、カレンに問い掛ける。

「これと同じ味の水を前にも飲んだ事があるんだ」

その水の味に身に覚えが有るカレンは、あの金髪の少女に出会った湖で、コルトから分けてもらった水筒の水を思い出す。

「……………」という事はお前、此处（水底の洞窟）に来る前に何処かの湖の水でも飲んだか？」

「…………… 多分そうだと思う」

確信が無いため曖昧な返答をしてしまうカレン。

「だったら、此处の水脈が繋がっている湖の水でも飲んだんだな、きつと！」

「湖と繋がっている？」

水脈が此处に繋がっている事は前に口口に教えて貰ったカレンであるが、湖と繋がっている事は初耳だった。

「上に在る運河から通じている水脈が何もこの洞窟だけに繋がっているんじゃない！ 水脈はあらゆる所に繋がっているんだ！」

つまり上の運河から流れる水脈は、此处の『水底の洞窟』だけに繋がっている訳では無く、あらゆる至る所に繋がっていると、口口はカレンに解説を再び行う。

「じゃあ、『カムーシャ』の少し離れた所に在る、あの湖にも繋がっているの？」

「おっ！ 何だ、あの湖に立ち寄ったのか？」

『カムーシャ』の少し離れた所に在る湖という言葉だけで、カレンの言う湖が、口口思い当たる湖と合致する。

「あの湖も運河の水脈で、繋がって出来た湖なんだ」

「そうなんだ……………」

自分が落ちた湖の水と同じ水を飲んだと、口口の説明で初めて分かったカレンは、あの湖と上の運河から流れる水脈が繋がっているも

知った。

「所で、この光る石は何なの？」

続いてカレンはこの空間内に来てからずっと気になっていた、この場所を照らしている無数にある白い光を発する石について、カレンは泉の中に光る石を眺めながら口口に尋ねる。

「その石は、奇石っていう鉱物に当たる石なんだ」

「奇石？」

これも知らないカレンに、口口はもう呆れずに受け流すように淡々と説明を続ける。

「奇石って言うのは、普通の石とは違い、あらゆる特性を持っている石の事を言うんだ」

「特性？ この石に特性が有るの？」

泉の中に手を入れて、壁に張り付いている奇石と呼ばれる、光る小さな石を掴み取り、カレンに見せるように目の前に付き出す口口。

「この石は、浄化石っていう水を浄水にする事が出来る石なんだ」

「浄水？」

「浄水の意味は、汚くて飲めない水を濾過と殺菌をして、綺麗な水になった水の事を指すんだ」

手の平に在る小さな奇石もとい浄化石を指でなぞりながら、口口は浄化石の特性を語る。

「まあ、簡単に言つと、この石は水を綺麗で安全なうまい水に変えてくれるっていう代物だ」

「それが……………この石の特性……………？」

知らない物の物への興味心か、カレンは口口の手の平に在る、小さな浄化石を渡してもらって、自分の手の平に乗せて、まるで宝石のようにその白い光を発する石を見詰め続ける。

「浄化石はこの大陸特有の原産物だからな、この洞窟以外にも色々な場所に有るんだぜ」

「此処以外にもいっぱい有るの？」

「ああ、この大陸のほとんどの場所に在るって噂だ！ 探そうと思

えはいくらでも在るみたいだぞ」

「そんなに……………」

この光る石が他の場所に沢山在ると知って、驚いたように目を細めるカレン。

「この浄化石は、この大陸全ての連中の生活を支えているんだ、昔から。だからこの大陸に住んでいる奴で、この石の事を知らない奴はいないってくらいだからなあ」

「生活を支えている？」

「俺の村（カム―シャ）もこの石のおかげで、安全な飲み水を井戸の中から、確保できるんだ、他の所も大して変わらねえ」

口口のこの言葉で『カム―シャ』で見掛けた井戸の事を思い浮かべて、カレンは一つの答えを見つける。

「それってつまり、この石が在るから、汚い水を飲まなくて済むって事？」

「そうゆう事だ、ちょっとは分かってきたな」

教えた甲斐があつたかのように、上機嫌になった口口は、先に進めると思われる、来た道の真っ直ぐ前に在る、奥の穴の方に体を向ける。

「さて、そろそろ行くか！」

「えっ？ もういいの？」

この場所に来て数十分しか経っていないので、この短い休憩の中で口口の回復の早さに信じられないと言いたげ顔に変化するカレン。

「大丈夫！ 腹も少しは膨れたし、水も飲めたし、これくらいの時間で休めたから、もう全開だ！」

「本当に？」

「本当に大丈夫だって！ それに此处でぐずぐず時間を潰していたら、後ろで追っかけて来る盗賊達に追い付かれるからな」

「……………それもそうだね」

自分達が追われている身だという事は、この洞窟に入った時から分かっていた事だから、口口は確実に逃げ切れるように此处で休憩し

て体力の回復を短時間で済ましてようだ。

「それに、また地震が起こって、壁にヒビが入って、水脈が噴き出すのはもう勘弁だ」

前の空間内の出来事を予測して、この空間内でも起こるかもしれないと恐れた口口は早く先に進む事にしたようだ。

「地震って、此処（水底の洞窟）でよく起こるの？」

「此処だけって話じゃねえ、この大陸事態でよく起こるんだ！」

「？ それって……どうゆう意味？」

「この地震もこの大陸特有の現象なんだ。この地震は毎年何十回も起こる！ おまけに今年は特に多いんだ！」

「現象……」

地震は毎年起こって、今年は特に多いと口走る口口は、カレンの反応を見向きもしないで話を進める。

「俺様が生まれる前のずっと前の話だが、昔は今と違って、此処は運河の先を渡る為に普通に人々が渡っていたみたいでな。多くの人が此処を通っていたんだ」

「え？ じゃあ何で此処は、誰も通らなくなったの？」

「……昔ある時、大きな地震が起こってな、その地震であの時に壁にヒビが入って、それが運悪く大きな水脈に当たっちゃったみたいでな」

声が急に質が低くなった口口の声は、カレンの耳に小さく響く。

「洞窟内をあとという間に埋め尽くす程の水が流れ込んで……」

……その時、洞窟内を通っていた人達は水に飲み込まれ、大勢の犠牲者を出したそうだ……」

「そう……か……」

「まっ、聞いた話によればだがな……」

「……」

「……」

何て言えばいいのか、何となく言葉が見つからないカレンは口口が今話していた瞳の奥に悲しみのような物を感じた。そして二人の間

に少しの沈黙が支配した。」

「っで、でな！　それ以来、洞窟を通ろうとする人は居なくなつて、どうにか運河の先を渡ろうと洞窟と違つて、安全で早く運河を渡る為に何十年掛けて、今は地震のせいで修理中の大橋を建設したつて話だ！」

妙に気まずく感じた口口は、いつも通りに声の質を戻して話を持ち直す。

「その橋は、君が生まれる後に出来たの？」

調子が戻つた口口に、カレンは話を振りやすくなり、さつきと同じ調子で口を開く。

「いや、確か……………俺様が生まれるちよつと前に出来たらしいぞ」

「そうか……………その橋が出来たから此処はもう誰も来なくなつたんだね」

「俺達を除いてな……………」
「あつ、そうだった……………」

誰も、もう通らない洞窟を通ろうとしている事をすっかり忘れていたカレンに、口口は忘れんな！と突っ込んだ後、足を進め、先に続いていると思われる奥の穴に向かう。

「ああ！　ちよつと待って！」

「ここで、もうたらたら話している暇は無いぞ！　さつさとこの洞窟から出るぞ！」

「……………ああ！　ちよつと！」

慌てて口口を追い掛けるカレンは、元気を取り戻した口口に何処か嬉しさを感じ、奥の穴に入つて行つた口口を駆け足で追う。

「待ってよ！」

「置いて行かねーよ！」

カレンを待っていたように、ゆっくりと歩いていた口口にカレンはすぐ追い付き、二人は隣り合わせでまた暗くて狭い通路を歩き続けた……………

待ち伏せ！……………のつまりが……………

……………そして、また暗闇の中を歩いて数十分、二人の目に白い光が暗い通路の先に見えた。

「あれは……………」

「また浄化石の光か……………」

二人は暗闇の先に輝く光は、浄化石だと視認し、その浄化石の光に誘われ、光の先に何が在るのか、確かめる為に前へと進む。

「！！」

光の元にたどり着くと眩い光が、二人の目を一瞬くらまし、視界が正常に戻ると、二人の目に眩い光を放つ大量の浄化石が壁や地面に埋まっており、今までの空間より5倍くらいの広さの円状の空間に足を踏み入れていた。

「すげえ！　これ全部、浄化石か！」

「……………綺麗だね」

前に空間よりも比べ物にならない程の大量の浄化石を目に、驚愕する口口と空間内を埋め尽くすほどの量の浄化石は、空間内を眩く照らし、宝石と思わせるそれぞれの綺麗な光は空間内を幻想的に美しく写し、カレンはその光景に目と心を奪われた。

「此処はさっきよりも広いな」

「うん、それに泉って言うのも二つ在るね」

この空間は前の空間よりも広いだけでなく、泉が壁の両方の端に円を描くように線状な形の泉が二つ存在していた。

「この量の浄化石はすごいが、此処は出口じゃないからな……」

「此処も違うみたいだね」

期待していた訳じゃないが、早く洞窟から出て、盗賊たちから逃げたい口口は、此処が出口である事を心の何処かで願っていたらしく、顔を少し沈め、軽く舌打ちをする口口。一方隣に居るカレンは、口口が浄化石の説明の時に泉から取り出した小さな浄化石をまだ手に

持っていたらしく、その手に在る小さい浄化石を今居る空間全体に埋まっている浄化石と見比べる。

「此処の浄化石は、さっきいた所よりずいぶん大きいね」

「言われてみればそうだな……………って、お前まだそれ持っていたのか？」

声に釣られて、空間内の浄化石の大きさを改めて確認した口口は隣に居るカレンが前に居た空間で取った小さな浄化石を持っている事に気が付く。

「綺麗だから、持って来ちゃったんだ」

「持ってきてどうするんだよ！ 持っていたって役には立たないんだぞ！」

「そうかな？」

「……………まあ、そんな気に入ったら、ずっと持っていれば良いんじゃないか？」

「じゃあ……………そうするよ」

自分の宝物が出来たみたいに大事そうにズボンのポケットにしまい込みカレン。口口は子供みたいな行爲をしたカレンを置いて、空間内の奥に前の空間同様、先に続いている通路と思わしき穴が在るという事を目視し、その穴に向かって足を進める。

「とりあえず、此処には用はねえ！ 先に進もうぜ！」

この場で長居している場合では無いので、口口は一刻も洞窟から出たいが為にカレンの意見を聞かずに、奥に在る通路の穴に向かって足を進め……………空間内の中心に差し掛かった時。

「おっと！ ここからは立ち入り禁止だ！」

「……………」

不意に空間内にカレンと口口の声では無い声が響き、口口は足を止める。

「この声は……………」

聞き覚えを感じるカレン。その声は口口が向かおうとしている奥の穴から聞こえ、そして穴の中から人影が二人の目に映る。

「どうやら、ハン達をうまく撒いたようだな！」

穴の中に居た人影は、ゆっくりと歩きながら穴から出て、薄暗くて姿は良く見えなかったが、空間内に入って来て、辺りの広がる浄化石の光でその姿がハッキリと目で確認できた。

「運がいいな、クソガキ！」

「！　あなたは！？」

現れた相手はカレンがつい最近で見知った顔で、目が隠れるくらいのやたら髪の毛が長いその男は、カレンとコルトが『カムーシャ』に着く前に襲い掛かって来た盗賊の一人で、この『水底の洞窟』に入る前にカレンを待ち伏せしていたスキンヘッドの盗賊の仲間でもある。

「この間の借りを返しに来たぜ！」

ロン毛の男は腰に掛けてあった剣を抜き、空いた片手の手の平にポンポンと上から軽く叩いて歩きながら、ニヤリと笑い。それに続くかのように男の後ろから盗賊の仲間達がゾロゾロと奥の穴から出て来た。

「マジかよおい！　勘弁してくれよお！」

また不測の事態に顔が青ざめて、カレンの前まで後退りする口口。それに追い打ちするように盗賊達は更に奥の穴の中からどんどん出て、数は一向に増えていき、見た限り洞窟の前で待ち伏せしていた盗賊達と同じくらいの数、50人は軽く超えていた。

「ケビー！　あいつが来たんだなあ~~~~~！」

出て来た盗賊達の中にロン毛とスキンヘッドの盗賊と同じ、『カムーシャ』の前で襲い掛かって来た盗賊の一人の大男の姿が在った。

「そつだぜラジリカ！　借りを返す時だぜ！」

「ああ~~~~~、でも~~~~~もう一人見慣れない奴が居るよ~~~~~」

相変わらずなまった声で話す大男は、カレンの前に居る口口存在を指摘する。

「そついえば、そつだな……………おい！　お前！　そいつの仲

間か!？」

大男に指摘され、視線を口口に移し、正体が気になったロン毛の盗賊は口口にカレンとの関係呼び掛ける。

「お、おれは……………」

「？」

口籠る口口はチラッとカレンを見て、何か決心したかのように大きく口を開く。

「俺はこいつとは何の関係もない赤の他人だ!! 決して仲間じゃない!!!」

大声で自分とカレンは全くの無関係だと何故か全く説得力を感じない大嘘をつく口口。

「という訳で、君! 後は頑張れよ!!」

身体を回れ右をして、カレンの肩を軽く叩いて応援の言葉を贈り、来た道に戻る口口に、カレンは振り返って。

「そっちに戻ったら、あの盗賊の人達に捕まっちゃうよ?」

「あ……………」

来た道に戻れば、後ろからカレン達を追っている盗賊達に会ってしまふ事をカレンに指摘されて、はっと気付いた口口は、うっかりしていたと声を漏らす。

「そつえばそうだった!! 危ねえ危ねえ!!」

「それに、僕達の来た道の一つは岩に塞がれて、水で溢れ返っているよね?」

「う……………そうだった……………」

カレンの無自覚で駄目だしを喰らって、追い詰められている感覚になる口口。

「なんだよ、やっぱり仲間じゃねえか!」

「なかまなかま……………」

「ッ! し、しまった!」

盗賊達は話を聞いていたようで、話の内容によってカレンと口口が共に行動していた事を察したようだ。「そうと分かれば、容赦しね

え！ てめえら、やつちまえ！！！！」

ロン毛の盗賊の掛け声と共に他の盗賊達は、カレン達を円のように全方向で囲み、武器を取って構え、威圧を掛ける。

「来るよ！」

「ち、ち、ちくしょう！！」

背中を合わせて、お互いそれぞれの武器を構え、カレンとロロは迎撃態勢を取った。

「この数で勝てると思うなよ！！ クソガキ共！！」

カレン達を囲んでいる盗賊達の外で、ロン毛の盗賊が叫んだ直後、突然、天地がひっくり返るように空間内が激しく揺らいた。

「おっ、な、何だ！？」

「ま、また地震か！？」

「ぬっ！」

その場に居た全員が突如起こった激しい揺れに戸惑う、しかし揺れは一瞬で終わり、空間内は落ち着きを取り戻したが、束の間また再び激しい揺れが起こる。

「な、何だってんだ、一体！？」

「じ、地震じゃ無いのか！？？」

揺れが起きたら、すぐに止まり、そしてまた揺れが起こる。そんな事が何回も繰り返され、カレン達は何が何だか分からず、混乱せざる負えなかった。

「（気を付ける……………大きい何かが来る……………）」

「（えっ……………？）」

混乱の中、カレンの頭の中から声が聞こえた。

「い、今、声が！？」

「ああ！？ 何だって！？」

突然聞こえた謎の声に困惑するカレンは、ロロを呼び掛けるが、止まない揺れのせいでロロはカレンの声の全ては聞き取れなかった。

「！ お、おい、何かさっきより揺れが強くなってないか！！？」
地震と思われた揺れは、何回も繰り返されていく内に次第にその揺

れは強くなつていく一方で、揺れは一向に終わる事はなかった。

「これって、本当に地震なの!？」

「? どうゆう意味――」

言葉の意味を問い掛ける前に、空間内の壁が突如、ピシッと嫌な音を発したと一緒にとても大きなヒビが入った。

「か、壁にヒビが!！」

「でやんす~~~~~!!」

空間内を揺れは壁にヒビを入れ、更に揺れはますます激しさを増し、ヒビを次第に拡大していく。

「! この音は？」

「何だ、この音!？」

揺れの音の中で、不可思議な音が混じっている事に気付くカレンと
口口、その音はまるで壁を砕き割っているような鈍い音。

「あつ! か、壁が!！」

「く、崩れるぞ!!!」

壁はもう無数のヒビが出来、限界を達しようとしていた。

「(……………来るぞ!)」

「!」

「プルルルルルルルルルル!!!」

また聞こえた謎の声に、カレンは首を左右に振って、声の主を探そうとしたが、壁のヒビの奥からまた聞き覚えのある鳴き声が空間内に響く。

「これは!？」

この鳴き声に口口とカレンは気付かない訳がなかった、そして、ヒビが入っていた壁を爆発したかのように粉々に飛び散り、壁に埋まっていた浄化石も塵となつて綺麗な白い光を放ちながら飛び散る。

「! あ、あれは？」

「……………あ」

砕け散った壁に巨大な穴が出来ていた、その穴に粉塵のせいで良く見えないが、とても大きな影が穴の中にそこに在った。その巨大な

影は穴の中から飛び出し、カレン達の少し離れた所に着地し、地面を揺るがす程の振動を出して、その姿を現す。

その巨大な影の正体は、前に行き止まりだと思った空間で出会ったあの白いウロコと触覚のような目、そして鋭いハサミを持ったあの時の魔物だった。しかし、前に会った奴よりも、比べ物にならない程の巨大さだった。

「な、な、何なんだよコイツ!!?」

「ちよ、超デカイよ~~~~~!!」

あまりの大きさとその巨大な身体から出る威圧感に、カレン達や盗賊達も戸惑う。しかしそんなカレン達の心情などお構い無しに、魔物はその巨大な体を震わせて……………

「プルルルルルルルルルル！！！」

耳鳴りが起こる程の大きな鳴き声と共に、カレン達目掛けて突進した。

「！！！！」

「な！ は、早っ……………？！」

魔物はその大きな身体に似やわず、俊敏な動きでカレン達の所まで一気に近付き、大きな鋭いハサミで盗賊達を薙ぎ払った。

「ぐわっあああああ！」

「ひひっ!!」

カレン達を囲んでいた盗賊達の一角は、魔物の薙ぎ払いにあっけなく吹き飛ばされ、ロン毛の盗賊は、その圧倒的な力に恐怖を感じ、体を震わせた。

「い、今だ！ 逃げるぞ！！」

「うん！」

盗賊達は魔物の攻撃に手が負えず、混乱状態に陥り、その混乱に乗じて口口とカレンはその場から離れようとした。

「う……うわあああああ！！」に、逃げろ――――

! ! ! !

とても敵う相手ではないと、怖気づいた盗賊の一人が、叫び声を上げて、逃げだした。それに乗じて他の盗賊達も次々と逃げ出し、奥の穴の通路に走って行った。

「あ！ お前ら――！」

盗賊達が次々と魔物にやられ、そして追い打ちを掛けるかのように味方の逃亡に更に焦りを感じたロン毛の盗賊は、このままでは自分もやられると思い。

「くそ！ おいラジリカ――！ 俺達も逃げるぞ――！」

ロン毛の盗賊は自分も逃げる事に決め、仲間の大男の名前を叫びで体を振り向かれるが。

「あわわわわわわ………」

魔物のあまりの強さと迫力に、外見に似合わず怖気付いて腰を抜かしまった大男は、地面に尻もち付いたまま、震えながら呆然としていた。

「お……おい！ ラジリカ――！ 逃げろ――！」

「あ、あ、足が……… 足が震えて、動けないよ――！」

腰だけじゃなく、足まで動けない大男にロン毛の盗賊は駆け寄って助けようとしたが、魔物が殆どの盗賊達を蹴散らした後、次はロン毛の盗賊に目を付け。

「け、ケビー――！ 後ろ――！」

「え………？」

ロン毛の盗賊が後ろを振り向くと、そこに大きなハサミを振り上げているあの巨大な魔物が居て、ロン毛の盗賊はその魔物の大きなハサミで薙ぎ払われる。

「ぐふうっ――！」

「け……… ケビー――！」

大男の呼び掛けも虚しく、あっさりと魔物に吹き飛ばされたロン毛の盗賊は、まるで風船みたいにフワッと上空に舞い上がり、遠くまで飛ばされ、奥の穴の手前にたどり着いていたカレン達の前に降り落ちた。

「ぶふっ!!」

「うわぁ!!」

「なっ!!」

突然上から自分達の目の前に降って来たロン毛の盗賊に驚き、穴の手前で立ち止まるカレンと口口。カレンはロン毛の盗賊が吹き飛ばされて来た方向に目を向けると、そこには、今度は大男に目を付けて、ゆっくりと近づく魔物と腰が抜けて動けない大男の姿が目に見えび込んできた。

「!!」

「あっ! おい!!」

瞬く間に駆け出したカレンを呼び止める口口であったが、カレンの耳には届かず、カレンは魔物に襲われている大男を放っては置けず、魔物と大男の所に全速力で駆け寄った。

「プルルルルルルルル!!」

「あ……………あ……………あああああ!!」

勢い良く降り上げられた鋭い大きなハサミに、大男は恐怖のあまり思わず目を瞑ってしまい、そして巨大なハサミは大男に向かって振り下ろされた……………

巨大魔物戦

『カムーシャ』の住民たちの一軒家やよりも大きい、白い鱗を纏ったザリガニのような魔物は怯えて地面に伏せている盗賊の大男を叩き潰そうと容赦なくハサミを大男に叩きつけた。

「！！！」

「ぐううう！！！」

だが、振り下ろされた巨大なハサミは獲物に届く寸前に駆けつけて来たカレンに受け止められ、カレンは魔物の攻撃から大男を守った。

「お、おまえ……………」

「ぐつ……………！！！」

魔物の攻撃を受け止めたカレンであったが、力押しでは魔物の方が圧倒的な上で、徐々に体が押されていき、カレンを支えている両足首が少しずつ屈んでいった。

「おい！！ 何やってんだよ！！ 俺達も逃げるんだよ！！！」

魔物の力押しに必死に耐えているカレンの耳に口口の声が響く。

「そんな化け物に勝てる訳無いだろ！！ 早く逃げろ！！！」

この状況でこの巨大な魔物に勝てるとは、思ってもみなければ、戦う事も考えてはいない口口は一目散に逃げる事をカレンに必死に叫んで伝えたが、カレンは口口の方に顔を向け、首を横に振る。

「でも…………… 此処で逃げたら、この人達は殺されちゃうよ！！」

魔物の攻撃で地面に横たわっている盗賊達に目を向けながら、今でも魔物の押し潰されそうな力に両足が折れそうなカレンは、声が大にして口口に伝える。

「な、何を言って……………」

「僕は……………！！！」

言葉を遮るようにカレンは口口の言い分を跳ね除けて、心の底から湧き上がってくる気持ちを籠めて、口に出す。

「僕は…………… 命を守る！！！！」

眼つきが変わって、目の前の命を見捨てないと叫んだカレンは、頭上に在る大剣で受け止めている魔物の巨大なハサミを受け流し、ハサミはカレンの体を横に通り過ぎ、地面を叩き割る。

「！！！」

「せいやっ！！！」

受け流して、すかさず攻撃に転じたカレンは自分の横を通り過ぎたハサミの腕に大剣を縦に振り下ろす。

「っ！？！」

振り下ろされた大剣は魔物の腕に直撃するが、魔物の白いウロコは鉄のように硬くようで、剣はその硬いウロコに守れられた腕に何のダメージも与えられず、弾き返される。

「プルプル！！！！！」

「！！！」

これはお返しだと、言わんばかりに魔物はもう一方の鋭く巨大なハサミを開いて、カレンを挟み込もうとした。

「よ、避けるーーーー！！！」

「くっ！！！」

口口の叫びも虚しく、カレンは避けきれず、そのまま鋭いハサミに挟み込まれる。

「！！！」

「あ……………！！！」

しかし、カレンは体が挟み込まれる前に、自分より横幅が広い大剣を利用し、それを自分の体の前に剣背が前になるように構え、鋭いハサミの刃と刃の間に隙間を作り、何とか体を切断されずに済んだ。大男は魔物の攻撃を二回とも防いだカレンに驚く。

「ぐっ……………うっ！！！」

だが、カレンが魔物のハサミを剣で挟み止め、体を挟まれないようにする状態はそう長く続かないようで、ハサミの挟み込む力はとても強く、カレンはその力に耐えきらずにいた。

「プルプル……………！！！」

剣の剣背を縦にすれば、体は挟み込まれてしまうし、剣を離してハサミから逃げて、武器を失ってしまうため、カレンは動く事が出来なかった。そして、カレンの剣を支えている力が限界に達しようとしていた。

「ああ、もう!!」

見てられなかった口口は、カレンの元に駆け出し、走りながら弓を構えて、一本の矢に『マナ』を流し込み、矢の刃に赤いオーラが宿り、カレンを挟んでいるハサミに狙いを定めた。

「すいせい彗星!!」

放たれた赤いオーラを宿した矢は魔物のハサミの根元部分に浅く刺さり、矢は刺さった直後赤いオーラの『マナ』は赤くて眩しい光を放って爆発した。

「!!!」

「うわっ!!」

空間内に響き渡る爆音、ハサミの先の方に挟まっていたカレンは、爆発した根元部分から少し離れたいたおかげで爆発に巻き込まれずに済み、更に爆発の衝撃で魔物はハサミの力を緩めてしまい、カレンを離してしまう。

「よし!!」

「プルルルルル!!」

ハサミから解放されたカレンであったが、魔物のハサミは爆発したのにただ焦げただけで、その焦げたハサミを振りまわす魔物の姿に、まだまだ元気に使えるように見えた。

「う、うそ!?!」

たったそれだけで済んだ事に驚く口口を置いて、魔物は邪魔をされた事に頭が来たようで、今度は口口に目を付け、その巨大な体を口口の方に向け、口口と思われる三角形形状に開いた穴が触覚のような眼の下に現れ。

「プーーーーーッ!!!」

三角形の口から、洪水でも起こったかのような怒涛の勢いの大量の

水が噴き出し、口口に向かつて一直線に伸びて突進する。

「ええっ!!」

予想外の攻撃だったが、距離があつた御かげで、紙一重で避けられた口口であつたが、放たれた大量の水は、行き止まりの壁を当たり、水は壁を削り取るように砕いて破壊し、その攻撃の破壊力の強さを物語っていた。

「はあああああ!!」

魔物が口口に体を向けた為、カレンは魔物の背後を取る事ができ、その巨体な体の腰から上に飛び上がり、背中の部分と思われる所に十字斬りを放った。

「がっ……………!!」

しかし、カレンの攻撃は、あの硬くて白いウロコのせいでまた弾かれ、魔物の体はビクともせず、何も堪えてなかった。魔物はカレンが襲ってきた事には目も繰れず、引き続きに口口を狙い続けた。

「ぐっ!!」

何の成果も無く、虚しく着地したカレンの顔に焦りが浮かぶ。元々カレンの大剣のような形をした魔装器まそうきは、剣の形をしていても剣のように刃はそれ程鋭く訳では無く、まるで剣に鞘を被せたように刃の部分は滑らかな円状で、斬るというより叩くという鈍器のような攻撃しか出来ない。

「この……………喰らえ!!」

「プルルル!!」

魔物はカレンが襲ってきた事には目も繰れず、引き続きに口口を狙い続け、口口も自分の有利な距離を保ちながら応戦する。

「十点矢じゅうてんや!!」

構えた弓に矢を十本揃え、その十本を器用に一斉に放つなどという離れ技を見せる口口。

「!!」

全ての矢は魔物の体の至る所に刺さる。体が大きい為、当てるのはそう難しくは無かつた様だが、刺さった矢は白いウロコに浅く刺さ

ただだけで、魔物には何のダメージも与える事はできなかった。

「プルルルル！」

「くそ！　なんて頑丈なんだよ！！」

攻撃がまったく効かない相手に口口も焦りを強くしていく。そして、魔物は両手のハサミを高速回転をし始めた。

「？　何だ？」

「……………ドリル？」

ドリルと見抜いた口口の応えるようにその両方のハサミを地面に当て、まるでドリルのように岩の地面をみると削っていき、空間内を強く揺らしながらあつという間に地面の中に潜っていった。

「消えた……………」

「あrikaよ……………あんなの！」

地面の下に消えて行つた魔物に啞然とする口口とカレン。

「（どうやら……………あのドリルみたいな物で、この洞窟内を削つて、道を作っていたみたいだな？）」

魔物が地面に作った大きな穴を見ながら、魔物の洞窟内での移動方法を憶測だが理解した口口であつたが、その直後に空間内がまた激しい揺れに襲われる。

「チツ！　またかよ！」

繰り返される揺れに苛立ちと焦りを抱きながら、魔物が何処から現れるのかを警戒しながら探す口口にカレンは直感的に魔物が何処から来るのか予測がついた。

「に……………逃げて！！」

「え……………？」

気付いて叫び呼んだ時にはもう遅かった、口口の地面の所だけ一番激しく揺れ、やがて地面にヒビが入り、何かを削り取るような音から聞こえた瞬間、口口の足元の近くから巨大なハサミが地面から飛び出した。

「がっああああああ！！」

「っ！　口口！！！！」

ドリルみたい高速回転したハサミ自体には当たらなかったが、突然、
口口の下から飛び出して来た魔物の巨大な体に吹き飛ばされ、受身
を取れず口口は地面に叩きつけられる。

「プルルルルル……………」

「う……………うう……………」

当たり所が悪かったのか、すぐには立ち上がれずいた口口に、魔物
は倒れて身動きできない口口にゆっくりと大きな足音を起たせなが
ら近づいて行く。

「や、やめろ！！」

剣を腹の横に持ちながら構え、口口を助ける為に魔物の方に刃を向
け、突進しようとしたカレンに。

「（取っ手の上の方にあるトリガーを押せ！）」

「えっ！？」

また聞こえた謎の声に驚くカレンにあったが、何故か言われた通り
に取っ手の上の方にあるというトリガーという物を急いで探して見
ると、剣格の前の辺りに四角形状に凸みみたいな部分があり、カレン
はそれを親指で押してみる。

「！」

凸部分を押すと、突如刃先の中央が別れ、その刃と刃の隙間からピ
ンク色の光の矢が飛び出す。

魔物「！！！！」

光の矢は魔物の腹の横に直撃し、白いウロコは黒く濃く焦げ、魔物
は悲痛な悲鳴を叫ぶ。

「こ、これは……………？」

「び……………ビーム……………？」

カレンの魔装器から出た光の矢をビームだと推測した口口はボソツ
と呟く。一方カレンは何が起こったか分からず困惑するが、それを
助けるかの如く、大剣の剣格部分に在る碧い珠から文字が浮かび出
て、カレンはそれに驚きつつその文字を読みが挙げる。

「BEAM・CANNON……………？」

首を傾げながら呟いたカレンは、この名前が何なのか、また聞こえた謎の声がどうか、そんな頭の中で思い浮かんだ疑問を後回しにして、今は戦う事が最優先だと割り切り、刃先を魔物に向き直し、凸部分みたいなトリガーを再び押す。

「プ、プルルルルルルルル！！！！」

トリガーを引く度に刃と刃の隙間から光の矢が目にも止まらぬ速さで発射され、魔物はその光の矢を喰らう度、身が焦げる程の熱さと痛烈な痛みが体を走り、悲鳴を上げ、足を後退させ口口から離れて行き、ハサミで体を庇いながら怯んでいった。

「（効いている……………！）」

剣先から次々と発射させる光の矢に、魔物は耐える我慢の限界が来たようで怒りが最頂点に達し、光の矢をハサミで薙ぎ払い。標的をカレンに変えて、三角形の口を開き。

「プルーーーーー！！！」

「！！！」

三角形の口をカレンに向けて、口から大量の水を放射し始めた。

「くっ！」

前から怒濤の勢いで迫り来る大量の水をカレンは慌てて避けるが、放射されている水は止む事は無く、魔物は追い掛けるように水をカレンの方へ走らせ、カレンも今度は横から迫り来る鉄砲水から逃げるために走り出した。

「ま……………まずい！」

まだ地面に叩きつけられたダメージで動けない状態の口口は、迫り来る大量の水から逃げているカレンを見て、このままではまずいと思い、腰に掛けてある鞆に手を伸ばした。

変貌

ザリガニ的な魔物の口から大量に飛んで来る鉄砲水に当たらないよう、目を配りながらカレンは全力疾走で水との距離を伸ばしていた。
「！！！」

このまま鉄砲水から逃げ続け、水が尽きるのを待とうと思っていたカレンであったが、視界にある物が飛び込んで来て、急に足を止めてしまう。

ラジリカ「あ……………お、おまえ……………」

そこには未だに体が竦んで、地面に尻もちを付いている大男がカレンの走る道の前に居て、カレンはこのまま進み続けたら彼が水に襲われてしまうと気付き、この先には進めないと足を動かさなくなってしまう、そして、魔物の放つ鉄砲水がすぐそこまで迫っていた。

「させるか！！」

その時、口口が鞆から取り出したのは、口口特製お手軽爆弾で、その導火線に火を付けて、魔物の口に向けて放り投げた。

「！！！」

爆弾は魔物の顔の近くで、爆発して空間内また爆音が響き渡り、魔物は突然が喰らった爆風のダメージの所為で、放射していた水の方針が大きくズレ、水はカレンの横を斜め上に上がって外れる。

思わぬ妨害で魔物は怯んで一旦、水の放射を止め、そのお陰でカレンは一時難を逃れた。

「（た……………助かった……………」

心の中で安堵の息を漏らすカレンは、すかさず辺りを見渡し、まだ地面に倒れて動かけない盗賊たちの存在を見て改め、このまま戦いが長引いたら彼らを巻き込んでしまうと悟る。

「このままじゃだめだ……………もっと決定的なダメージを与えないと！」

この戦いを速やかに終わらせるためにはあの巨大な魔物に倒すしか

ないと悟ったカレンに反応するか如く、突如カレンの魔装器まそうぎが眩い光を放った。

「こ、これは!？」

「な……………何だ？」

「プルルル!？」

「この光は……………!？」

その場に居た全員がカレンの魔装器まそうぎに目を向ける。眩い光を放ちながら大剣の剣格に付いている核コアであるストライクの背中が中央に別れて、その別れた隙間にピンク色に光る小さい珠が現れ、それと同時に刃の中央から刃の至る所に切れ目みたいな別れが複数も出始め、カレンは一体全体何が起こるのか全く見当が付かなかったが。

「（解放するのだ……………!）」

「（ま、また!？）」

再び不意に謎の声がカレンの頭の中で響く。

「（核の……………開いた背中の中のトリガーを……………押せ!）」

「（と、トリガーって……………き、君は……………）」

頭の中で響く謎の声はカレンの問いを答えもせず淡々と語り続ける。

「（この魔装器の……………『ゼオラル』のもう一つの姿を……………解き放て!）」

「（もう一つの姿……………?）」

やがて謎の声は、頭の中で途切れ、カレンは言われた通りにストライクの背中が別れて現れたトリガーと思わしきピンク色に輝く珠を、ゆっくりと指先に触れ、少し力を入れて珠を奥に押し込むように押した。

「P U R G E ・ O

N!

声と共に剣の刃の切れ目の部分が全て外れ飛び、カレンの大剣の姿をした魔装器まそうぎは、以前の姿とは大分異なり、少し小さくなったが形はスリムになり、刃の方は触れる物を全て斬り裂くと思える程鋭く

輝き、それと刃の部分だけがストライクと同じ山吹色に染まっていたが、剣背部分だけはライトピンクのままだった。

「コード・ゼオラ

ル」

姿がガラリと変わり終わった時に、また魔装器まそうぎから声が発し、その声の中にカレンの頭の中で聞こえた、あの謎の声が口にした言葉が入っていた。

「（ゼ・オ・ラ・ル……………？）」

その言葉に反応したカレンは、自分の魔装器まそうぎが変わったのに何か関係があるのかと思った。

「プルルルルル！！！」

「！！」

そうこう考えている暇は無く、魔物は何が起こったかは分からないが、お構い無しに攻撃しようと雄叫びを挙げ、再び三角形の口をカレンに向ける。

「（これなら……………やれる！）」

剣の変貌に驚きはしたが、以前には無い刃の鋭さと手に伝わる力に何とも言えない確信を持ったカレンは、剣を強く握り締め、颯爽と魔物に向かって走り出す。

「プ……………ル……………！！！」

「お、おい！ 避ける！！」

躊躇なく真っ直ぐ突っ込んできたカレンを返り討ちするみたいに、魔物は三角形の口から大量の水は放射し、水は勢い良くカレンに向かって真っ直ぐ伸びて行った。

「っあああああああ！！」

迫り来る大量の水を、正面から真っ直ぐ剣を振り下ろし、飲み込んだ物は全て破壊するような爆発的な勢いの水を一刀両断する。

「！！！」

大量の水をたった一振りで斬り裂き、カレンは走る勢いを衰える事は無く、そのまま魔物の懐に入り込む。

「プルルルルルル！！！」

懐にきたカレンを向かい討つ様に魔物はハサミを振り上げ、剛腕の腕でハサミを力任せに振り下ろし、カレンを叩き潰そうとした。

「はああああああ！！！」

振り下ろされた巨大なハサミにカレンは正面切って上空から来るハサミを打ち払うように大剣を振り上げる。

「！！！！」

巨大な鋭いハサミは、カレンの振り上げられた大剣にいと簡単に両断され、魔物は目の前の出来ごとに驚愕し、体を硬直させてしまふ。

「もらった！！！」

魔物に出来た隙を見逃さず、もっと深い懐に入り込んで、魔物の腹に目掛けて剣を力強く真つ直ぐ突き刺した。

「プルルルウ！！！」

剣は魔物の腹に深く突き刺さり、赤い血が噴き出す。魔物は激痛が走って、苦しみながらも腹に剣が刺さったままの状態で、力を振り絞ってもう一本のハサミを高速回転させ、そのままカレンに勢い振り下ろした。

「！！」

頭上から来るドリルのような巨大なハサミに慌てる事も無くカレンは、剣に力を溜め込み、その力を爆発させるかのように一気に刃の外側に解き放つ。

「裂閃衝！！！！」
れっせんしょう

まるで爆発したかのように腹に刺さった剣先から強い衝撃波が炸裂し、魔物はその衝撃でその巨大な体を宙に浮かせ、後ろの壁まで吹き飛ばす。

「！！！！！！」

吹き飛ばされた魔物は壁に激突し、そのまま重力に従ってゆっくりとその巨大な体を下に在る空間内を囲むようにある円状の泉に落ちる。

「はあ……………はあ……………」

魔物は大きな水しぶきと水柱を作って泉の中に落ちて行って、カレンはその様子を見届けるかのように呼吸を整えようとした。

「す……………すげえ……………！」

間近で見ていた口口は、あの巨大な魔物を捻じ伏せたカレンに驚きつつ歓声の声を上げる。

「あつ……………大丈夫？　口口？」

魔物は動く様子は無く、もう安全だと思ったカレンは、まだ地面に横になっている口口を心配して駆け寄る。

「あ……………ああ、ありがとよ！」

手を差し伸べられ、カレンに礼を言いつつその手を掴んで起き上がる口口。

「プルルル……………！！！」

「……………」

不意にあの巨大な魔物の鳴き声が聞こえ、カレンと口口は魔物が居る泉の方に振り向くと、そこには大きな水しぶきが上がり、数秒間の後、水しぶきが止むとそこにはもうあの魔物の姿は何処にも居なかった。

「あ、あいつ、あの状態でまだ動けるのか！？」

計り知れない魔物の生命力に驚きを隠せない口口。

「でも、あの状態でもう戦う事はできないよ、多分逃げたんだよ」
傷の具合から、もう戦う力はもう無いと冷静に判断したカレンは、

口口に安心させるように解説をする。

「そうだな……………大丈夫か！」

妙に説得力のある発言に納得して安堵の顔を見せる口口に、カレンも笑顔で応える。

「す、すげえんだな、おまえ……………」

「ぬお！　お、お前居たのか！？」

「……………何の用？」

いつの間にかカレン達の所まで来ていた大男に驚く口口とは反対に

カレンは落ち着いた態度で大男に問い掛ける。

「も、もうオイラ達に戦う力は無えだ、だから今はお前たちを襲う事は無いから安心しろ！」

見ての通りこの空間内で、盗賊達の中でともに動いていられるのはこの大男だけで、自分一人じゃどうにもならない事を察した大男はカレン達に自分達は今もう戦う意思は無いと告げに来たようだ。

「そう……………分かった」

事情が分かったカレンは、大男の意思を承諾する。

「おーい！！ ケビー！ ラジリカ！ 獲物は捕まえたかー！
ー！！！！？」

するとカレン達の来た穴の通路から、この『水底の洞窟』の出入り口の前で待ち伏せをしていたスキンヘッドの盗賊の声が空間内に届いて、ロロは顔をギョツとせさる。

「げ……………あいつらもう此処まで来たのかよ！」

「ロロ、走れる？」

「あ……………ああ！ 大丈夫だ！」

このまま此処に居たら、あのスキンヘッドの盗賊達に見つかるので、カレンとロロは急いで外に続いていると思われる奥の穴の通路に向かって走り出す。

「あつ！ 待つてくれ！！」

「えっ？」

走り出した直後に大男に呼び止められたカレンは、キョトンとした顔で振り向く。

「その……………助けてくれて、ありがとうなんだな……………」

大男のお礼に意表を突かれたカレンであったが、すぐに顔に笑顔を浮かべ、手を振って返事をし、奥の穴の通路に再び駆け足で足を進めた……………

……また暗くて狭い通路に入り込んだカレンはそう
経たない内に口口の背中を発見する。

「あっ！ どうしたんだよ、遅かったじゃねえか！」

先に穴に入って進んでいた口口に追い付いたカレンに遅れて来た理由を尋ねる。

「お礼を言われたただだよ」

「？」

その問いに笑顔で返すカレンに口口はまったく理由が分からず首を傾げる。

「まあ、どうでもいいけどよ……………それよりお前さ……………」

……

「ん？」

急に改まった態度になった口口にカレンはどうしたのかと耳を傾ける。

「あのさ……………怒ってないのか？」

「何が？」

「だから……………その……………お、お前を置いて逃げようとした事について怒ってないのか？」

「……………そうなの？」

「…………………………」

少しの沈黙が二人を支配し、カレンはいつも通りの緊張感の無い顔のままで、一方口口はまた怪訝そうな顔に変わる。

「そうなのって……………お前、あれは明らかにお前だけ置いて、

俺だけ逃げようとしたじゃないか！？」

「え？ あれって君だけがにげようとしたの？」

「そうだよ！ だから、それについて怒ってるかどうか聞いているんだよー！」

若干、逆ギレ気味なってしまった口口は、一旦我に返り、咳払いをして話を戻そうとする。

「で、どうなんだ？ やっぱり……………怒ってるか……………？」

恐る恐る尋ねる口口にカレンは何も怒った様子は無く。

「別に怒ってないよ」

「……………本当か？」

「うん、僕は何も怒ってないよ」

「ど……………どうしてだよ？」

怒っていない理由を口口は勇気を振り絞って聞く。

「どうしてって、君には色々助けて貰ったからね」

「えっ……………？」

助けて貰ったという言葉に口口は、どういう意味なのか分からず、カレンにその言葉の意味を尋ねようとする。

「魔物と戦った時も、怪我を治してくれた時も、この洞窟の事や色々な事を教えてくれた事に助けて貰ったから」

尋ねる前にカレンが話を勝手に進め始め、口口は意外そうに目を見開く

「助けて貰ったって……………まさかそんな事でかつ！？」

「うん、そうだよ」

「いやでも、それとあれとはちよつと話が……………」

「それにさ……………」

言葉の続きをカレンの言葉に口が止まる口口。

「あの大きい魔物が出た時、逃げるぞって言いながら、僕を助けてくれたじゃない」

「あ、いや……………それは……………何て言うか……………」

あの巨大な魔物の戦いの時に、勝てる訳がないから逃げる事を優先しようと言っていた口口が、自分の身を省みず、カレンを助けた事にカレンは口口に恩を感じていた。口口も自分の行動を今振り返って、照れ臭そうに頬を微かに赤くする。

「お、お前には……………俺様の力が必要だと思ったからだよ！」

「……………そうだろうね、本当に君の助けが無かったら……………僕はきつとあの魔物にやられていたと思うよ」

自分の気持ちを誤魔化す口口と素直に自分の気持ちを伝えられる力

レン、この二人の会話のグタグタ感は今になっても変わってはいないようだ。

「けどよ……………」

「？」

ところがロロは何か言いたいそうに口をモゴモゴさせ、そして少し間が経って、口を再び開く。

「俺様も……………お前の助けが無かったら、きっとあの馬鹿デカイ魔物に食われていたと思うから……………」

「……………」

「だから……………ありがとうな、カレン！」

「……………うん！こっちこそありがとう、ロロ！」

お互いやつと名前呼び合う事になった二人に小さな繋がりが出来たと思える瞬間だった。

「……」

そしてこの洞窟内の通路を走って長い二人の目に、眩い太陽の光と出口と思われるシルエツトが視界に入ってきた。

「おっ、出口だ！急ぐぞカレン！」

「あつ、待ってよ！ロロ！」

走る速度を上げたロロに置いて行かれないようにカレンも速度を上げて一緒に、外の世界に続いている光が差し込む出口に走って行くのだった……………

全身全霊全力全開の空振り

.....外は昼を過ぎてもう数時間が経ち、日も少し落ちて来た頃、カレンと口口は長くて暗い『水底の洞窟』をようやく脱け出したていた。

「うわっーーーー！ やつと出られたーーーー！！」
久しぶりに見るかのように外の風景と日差しに懐かしさを感じる口口。

「うん！ 外の空気がおいしい！」

深呼吸をして外の空気を楽しむように吸いながら賛同するカレン。

「はぁ~~~~~.....しんどかった.....！！」

「本当.....そうだね」

口から零れる疲労の溜息と本音とは裏腹に、此処に来るまで数々の障害に出くわした『水底の洞窟』の出口を振り返って見て、此処まで来た事にカレンと口口は何処か達成感のようなものを感じていた。

「だがしかし、此処まで来たら『レイチム』までもう少しだ！」

「確か軍用都市『レイチム』って言うんだよね？ 何処に在るの？」

「ああ、あそこに見えるのが『レイチム』だ！」

指差す方にカレンは目を向けると、少し遠いが丘の下を通り超えた先に木に覆われた山々の間に囲まれた細長い建物のような物が幾つもそこに立っていた。

「あのビルが見える所が、この大陸一番の軍事力を持つ軍用都市『レイチム』だ！」

「ビル？」

説明の中で大陸一番という言葉より、先にビルという単語に反応するカレン。

「まさか.....ビルも知らないのか？」

「うん」

記録喪失である事を知らないロロはカレンの常識知らずに頭を悩ませる。

「ビルって言うのは、あのデッカイ縦長の建物の事だよ」

幾つも在るビルという細長い建物をそれぞれに指を指してカレンに教えるロロ。

「あれ全部が？」

「そうだよ、あそこは軍の活動範囲を広める為と補給や増援、兵器の研究や開発を効率よく行う為に作られた都市なんだ」

「軍？」

「……………軍って言うのは、国や市民を守る為に作られた組織の事だよ」

呆れながらもカレンに分かるように説明するロロにカレンはある疑問が浮かび上がり、その疑問を口に出す。

「そっういえばロロは、これからどうするの？」

「ああ？ どうするって？」

急に話題を変えて来たカレンはロロにこの後どうするのかを尋ねた。
「だって、もう『水底の洞窟』を抜けられたんだから、もう僕と一緒に居る必要は無いでしょ？」

「あ……………ああ、そうだな」

思い出したかロロは、当初の洞窟を脱け出す目的を果たした事に対して、この後どうするのかを考え込むように頭を低くする。

「『カムーシャ』へ渡る為の大橋が直るまで『レイチウム』で待ってようかな？」

考えた結果、ロロは大橋が直るまで『レイチウム』に滞在する事に至った。

「じゃあ、『レイチウム』までは一緒だね？」

「まああ、そうなるな」

元々カレンは湖で会った少女にペンダントを届ける為に彼女が軍用都市『レイチウム』に向かったというので同じく『レイチウム』に

用が出来た口口とは洞窟内と同じ、目的地まで同行するという形になった。

「それじゃあ、早速、行こうかカレン？」

「うん！」

二人は『レイチム』に向かうために前の方にある丘の下に降りる為、木や茂みが生えていて下り坂になっている所に足を進めた……

……

……二人の歩いている道は昔、『水底の洞窟』を通っていた人達が使っていた道なのか、雑草が生えているがけもの道にみたいに先が木や茂みに邪魔されないように先に進めるようになっていた。

「しかし、あの馬鹿デカイ魔物に勝っちゃうなんてなあ……」

「？ どうしたの急に？」

不意に呟きだした口口にカレンは呟きの内容に首を傾ける。

「だってよ……絶対に勝てる訳が無いと思っていたあの化け物に倒しちゃったんだぜ！」

「でも最後は逃げてったよ？」

「まあ、そうだけだよ」

話の腰を折られそうになった口口は自然に話を戻そうとする。

「完全に倒すまでは行かなかったが、最後にあの魔物を捻じ伏せちゃうなんて……お前って本当に見掛けに寄らず、すごいんだな！」

普段からいつも緊張感の無いような顔している割には、『水底の洞窟』で遭遇したあの巨大な魔物を撃退したカレンの強さには驚きはしたが同時に尊敬に近い物を口口は感じていた。

「僕だけの力じゃない、口口の御かげでもあるよ……」で
も最後はこれが姿を変えてくれた御かげで、あの魔物を追い払う事

が出来たんだと思う」

自分の背負っている大剣の姿をしている魔装器まそうぎに視線を移すカレン。
この大剣がああ巨大な魔物戦で今のように鋭い刃に成ってくれた御
かげで、魔物を撃退出来たのはその場に居た口口でも納得するもの
だった。

「魔装器まそうぎか……………いいなあ！ 俺様もそんな武器がほしいぜ！」
羨ましそうにカレンの魔装器まそうぎもとい大剣に見詰める口口。

「あつ……………そういえば……………」

何かを思い出したように口口は、視線をカレンに戻す。

「お前どうして、あの時にあの無駄にデカイ盗賊を助けたんだ？」

「えつ……………？」

突然、話題を変えた口口はカレンに『水底の洞窟』で待ち伏せして
いた盗賊の一人の大男がああ巨大な魔物に襲われそうになった所を
何故助けたのかを尋ねて来た。

「放って置けばいいのに、あそこまでして助けるか？ こっちがあ
の魔物に殺られるかもしれないなかったんだぜ？」

「……………」

この言い分にカレンはその時の自分の心情を振り返ってみると。

「どうしてだろ……………？ ああラジリカって言う人が襲われそうな
所を見た瞬間、体が勝手に動いたんだ……………」

ラジリカと言うのは口口が言った、大男の盗賊の事である。

「体の奥底で、助ける！ って……………そう言う声が聞こえて、そ
したらそのラジリカって言う人も倒れている盗賊の人達も助けなき
や！ って……………良く分からないけど」

今思い返して見たカレンは、自分でも何で助けたかは分からないよ
うで少し困った顔をする。

「う……………ん……………つまり……………その……………」

「要するにあれか？ 困った人を見て、放っては置けなかったって
事か？」

助け舟を出すようにカレンに助言を加える口口。

「多分……………それだと思う……………」

答えに困っていたカレンは口口の助言の御かげで答えの糸口を見つけ、口口は予想が的中したかのように溜息を吐く。

「わざわざペンダントを届けるために此処まで来るわ、仮にも命を狙いに來た盗賊の命を助けるとは、とんだお人好しだな……………お前は」

「そうかな？」

「ああ……………それも、『ド』が付く程のな……………」

苦笑いをする口口に自分はそんなにお人好しかと思うカレンは足を止めずに二人は歩き続けた。そして二人がそういう話している内に、下り坂をいつの間にか下り終え、丘の下まで辿り着いていた。

「下り終えたから、このまま真っ直ぐ行ったら『レイチム』にたどり着くと思うぞ」

下り終えた先には、今でも人が使っているような道が続いており、口口はその道を指してカレンに真っ直ぐ行けば目的地に着けると伝える。

「あと少しだ……………さっさと行くぞ！」

「ねえ、口口？」

最後の道のりだと気を高くして進もうとした口口にカレンが呼び掛ける。

「あ？ どうした？」

呼び掛けられて、どうしたのかとカレンに顔を向ける口口。

「君が帰らなかったら、イミナちゃん心配するんじゃないかな？」

確かに『カム―シャ』と『レイチム』を行き来する橋が直るまで、『レイチム』に滞在していたら、事情を知らないイミナが帰らない兄である口口の事を心配するのではないかとカレンはそう思い浮かんで、口口に聞いてみると。

「大丈夫！ 俺、一週間も家に帰らない事も有るからな！ たった数日くらいどってことねえ！！」

何故か自慢げに鼻の下を人差し指で擦りながら事情を話す口口。そ

れを聞いたカレンは。

「一週間も何をしてたの？」

一週間何をしていたのかという素朴な疑問を口口にぶつける。

「……知りたいか？」

「うん……知りたい」

少し興味が浮んだカレンは焦らすように勿体付ける口口に更に興味が湧く。

「実はな………」

「実は………」

「この大陸の海の支配者、巨大大タコと戦っていたのだ！！」

「………」

その時、時間が止まったような音が響いた。

「小さな島を飲み込む程のとてつもなくデカイそのタコは、人々が怯え逃げる程の強さと凶暴さを持ち、誰もがその巨大なタコに手が負えなかった」

「………」

「しかし……し！ 人々に助けを求める声に応えるように、このバンチョー・ロロが現れ、巨大大タコと真正面から決戦を挑み、そして激闘の末、一週間という期間を掛けてやっと倒す事が出来たのだ！！」

「………」

話を盛り上げようと、ロロは体を使って自分の激闘を、声を大にして表現し、話の内容の凄さ（大袈裟ぶり）をカレンに語り続ける。

「そんでもって、『カムーシャ』に帰った俺様は………村の皆から英雄と称し、バンチョー・ロロと称えられて崇められ、尊敬と憧れの眼差しを向けるようになったのだ！」

「………」

「（さあ、どうだ！ こんだけ言ったら、後は何をすべきか………おまえにはわかるよな！！）」

期待に満ちた眼で、心の中で何かを要求しているロロは、カレンに

ある行動を求めていた。

「……………す」

「？」

ボソツと呟いたカレンの声が聞き取れなかった口口は、耳を立てて声を良く聞こえるようにする。

「す……………す」

「す？」

「凄い！！」

「……………はっ？」

予想外の発言に思わず耳を疑う口口。

「凄いよ口口！ 一人でそんな大きな強いタコを倒しちゃうなんて！！」

「えっ！？ いや、あの……………その……………」

「洞窟で会った、あのデカイ魔物よりもっと大きいそのタコを倒すなんて、口口って本当は凄いんだね！」

事もあるうか口口の作り話を本気で信じてしまったカレンは、口口の言った通り、尊敬と憧れの眼差しで口口を見詰める。

「『カムーシャ』の皆からそんなに慕われているなんて、口口は人氣者だね！！」

「ま……………まあ……………ははははっ」

ここまでマジマジと本気で信じて見詰められると今更、嘘だ！ っと言えなくなってしまうた口口は、自分に眼差しを向けるカレンを余所に心の中で。

「（何でそこで突っ込まないんだよ！ 普通は……………ハイ！ 嘘でしょそれ！！ とか、馬鹿じゃないの！？ とか、色々突っ込むだろ！！！！）」

本当は突っ込んで欲しくて、わざとデタラメな嘘を付いたのに、こちらの期待を裏切るかのように本気で信じたカレンに口口は、全身全霊、全力全開で空振ったような気持ちになった。

「……………これじゃあ、イミナと喧嘩して、一週間も家に帰れな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0994y/>

ユニヴァース

2011年11月4日14時05分発行